

東京のグランドデザイン検討委員会（第1回）

平成27年6月30日

【前田副知事】 それでは、ただいまから第1回東京のグランドデザイン検討委員会を開会いたします。私は進行役を務めさせていただきます、東京都副知事の前田でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、東京のグランドデザインの検討に向けた有識者・専門家の皆様との懇談を予定いたしまして、各分野の第一線でご活躍の8名の皆様にご出席をいただいております。ご多忙の中、まことにありがとうございます。

それでは、ご出席の皆様をご紹介申し上げます。

東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科長、山崎亮様。

【山崎様】 山崎です。どうぞよろしくお願いいたします。

【前田副知事】 シーラカンスK&H株式会社代表取締役、また東洋大学理工学部建築学科教授でいらっしゃいます、工藤和美様。

【工藤様】 工藤です。よろしくお願いいたします。

【前田副知事】 株式会社ニッセイ基礎研究所主任研究員、前田展弘様。

【前田様】 前田です。よろしくお願いいたします。

【前田副知事】 よろしく申し上げます。

音楽家、椎名林檎様、よろしくお願いいたします。

【椎名様】 お邪魔しております。よろしくお願いいたします。

【前田副知事】 チームラボ代表、猪子寿之様。

【猪子様】 猪子です。よろしくお願いいたします。

【前田副知事】 A. T. カーニー日本法人会長、梅澤高明様。

【梅澤様】 梅澤です。よろしくお願いいたします。

【前田副知事】 立教大学経済学部経済政策学科准教授、首藤若菜様。

【首藤様】 首藤です。よろしくお願いいたします。

【前田副知事】 内閣府IMPACTプログラムマネージャー、筑波大学大学院教授・サイバニクス研究センター長、CYBERDYNE株式会社代表取締役社長でいらっしゃいます山海嘉之様。

【山海様】 山海です。どうぞよろしく申し上げます。

【前田副知事】 どうぞよろしくお願ひいたします。

以上の皆様でございます。

なお、東京都側の出席者につきましては、お手元の座席表をもちまして紹介にかえたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

それでは、懇談に当たりまして、舛添東京都知事からご挨拶をいただきます。

【舛添知事】 どうも、皆さん、こんにちは。お忙しい中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。

昨年末に、これから10年後の東京ということを考えて、東京都長期ビジョンという政策集をつくりました。5年後にはオリンピック・パラリンピック、2020年、開かれるわけですけれども、そこでとまるわけじゃなくて、さらに伸びていかないといけないということで、今、世界の都市ランキングでトップがロンドン、2位がニューヨーク、3位がパリ、うちが4位にとどまったままだと。5位がシンガポール、6位がソウルで、後ろから追い上げられていると。そういう中でどうするかというときに、10年後だけでは足りなくて、2040年、今から20年、30年先ぐらいを念頭に置いて、大きなグランドデザインというものをつくってはどうかというふうに思ひて、私自身もいろいろ考えていますけれども、比較的、そのころに、まだ生きていらっしゃると言うのであれば、若めの皆さん方にお集まりいただいているんですが、少子・高齢化とか、人口減少とか、いろんな大きな問題があるんですけど、ハード・ソフトで東京というのはどうするかというのを、ちょっと根本から考え直してみたいなと思ひます。

私自身は、やっぱり豊かさとかゆとりで、お金、物質的には相当豊かになったんだけど、時間的な、やっぱりゆとりがないんですね。私は20代はヨーロッパで、特にフランスにいたもんですから、みんな1カ月バカンスとって、のんびりしてて、東京に帰ったら、そんなことやれないという状況で、何でこんなに時間的なゆとりがないんだろうか。

それと、もう一つ感じるのは、今そういうふうに、皆さん方、特にそうじゃないと思ひますけど、サラリーマン世代が、植木等さんなんかサラリーマンやった、あの高度経済成長時代というのは、ほんとうに会社人間で、会社のことしかない。だけど、やっぱり成熟社会というのは、仕事は仕事であるんだけど、趣味は趣味であって、それでその趣味のほうの仕事よりも金稼ぐような、極端に言ったら、そんなことがあってもいいと思ひんで、だからヨーロッパだけじゃなくて、私は歴史家なもんですから、江戸時代勉強してて、江

戸文化というのは実はそういう文化であったんで、伊能忠敬も養子に行って、そのうちを建て直した後、さっさとやめて、若い天文学者について、それで地図をつくったと。それで広重にしたって、あれ消防隊員だったんですね、今で言うと。それで絵がうまいものだから、定年退職して、できるだけ早く退職したいと。絵描いて、印象派含めて世界中に影響を与えるようになった。だから、そういう人生にはいろんな側面があるということ、もっと生かせるようにすればいいんで、やっぱり時間の面で豊かにならないと、いわゆる生き方は変わらないんじゃないかなというようなことも頭にあるわけです。

それから、そういう意味で、今、世界のランキング、先ほど申し上げましたけれども、まだ世界の大都市でやってないこと絶対やってやろうと思ってるのは、渋滞のない大都市つくろうと。中央環状線できたんで、今、首都高速、かなりすいてますでしょう。あれなんていうのは、たった5%、都心に来る車が減っただけで、5割ですよ、渋滞緩和率が。そうすると、頑張って2050年までやれば、一切渋滞がない都市に変わる。

一番腹立つのは、きのうも走っててそうだったんだけど、渋滞のあの箱の中でくだらん時間使うというのは、そんなら、さっと10分で行けるところ行って、それ1時間、きのうかかりましたから。そうすると、50分間、うちで本を読んだり、音楽聴いたりとか、好きなことやれるんじゃないか。絵描いたりとかね。そういうことも思ってるんで、今、いくつか思いつきのようなことを申し上げましたけど、科学技術とか、いろんな、道路とか鉄道とかいうものは、私たちが人生楽しむためにあるんで、もうちょっと楽しい街にしてはどうかなと思います。しかし、片一方では、少子・高齢化で保育所が足りないとか、老健が足りないとかいうことがあるんで、そういういろんな問題も楽しくアプローチできないのかなって。地域包括ケアなんてのは、やっぱり楽しさがないとできないような気がするんで、ご専門の方がおられると思うんで、今日はそんなことで、2時間たっぷり時間をとってございますんで、全く自由にご発言なさって、一切制限ありませんので、思いのたけをお話しいただいて、皆さんで議論をして、こういうことを積み重ねることによってコンセンサスを得て、こういう方向に東京を変えていけばいいんじゃないかというのが出ればいいと思いますんで、明るく楽しくやりたいということを申し上げて、一言ご挨拶します。よろしく願いいたします。

**【前田副知事】** ありがとうございます。

それでは、本日の進め方についてご説明いたします。

本日は「2040年代の東京」、これをテーマに、お手元の名簿の順番に従いまして、有

識者・専門家の皆様からご意見・ご提言をいただきます。その後出席者全員での意見交換を行いたいと思います。質問等につきましては、後半の意見交換の時間でお願いいたしますと存じます。

大変恐縮ですが、後半の意見交換の時間を多くとりたいと考えておりますので、発表はお一人様当たり10分以内ということでお願いできますでしょうか。

そして、皆様からいただきました資料をディスプレイに投影いたしますので、ご自身でパソコンの操作をなされる方は、お手数ですが、皆様から見て左手前方の窓際のところに操作卓がございますので、ご移動いただきまして、ご説明をお願いしたいと思います。

ご着席の場でご説明される方は、卓上マイクのボタンを押してご発言ください。

それでは、名簿に従いまして、最初に山崎亮様より、ご説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

**【山崎様】** ご紹介いただきました山崎です。じゃあ、10分間時間をいただいて、お話ししたいと思います。

ふだん、まちづくりとかワークショップということをやっていますので、その会場は、大体これの半分ぐらいの天井の高さなんですね。それぐらいだとわりと親しげにみんなしゃべれるんですけど、天井高いと、やっぱり緊張するんですよね。ちょっとだけ、ふだんのしゃべる場とちょっと違うので、若干トーンが変わるかもしれませんが、最初に1ページ目、自己紹介です。

コミュニティデザインというのを仕事にしていますが、今、お話ししたとおり、まちづくりというようなものの少し発展版みたいな、拡大版みたいなことをやっています。

最初、使われなくなった公園を、地域の人たちの力でどういうふうに楽しい場所にしていくか、地域の人たちと一緒にワークショップなんて話し合いをしながら、公園を元気にしていこうということをやっていたら、「それデパートでもできるんじゃない?」と言われるようになりまして、今、日本で一番高いビルになりました大阪阿倍野の近鉄百貨店のなかかいデパートの中に市民が入り込んできて、ショッピングもできるけれどもコミュニティ活動もできる、買い物集会場みたいな感じですね。買い物もできるし、公民館や集会場のような場所でもあるというような場所をお手伝いしました。その後、商店街や集落や、あるいは医療施設、福祉施設、最近では寺院、お寺なんかからも呼ばれまして、コミュニティの力をつけてほしいと言われて、それはお寺のほうが我々より先輩だろうと思うんですけども、新しい形のコミュニティというのをつukれないかという相談をいただくように

なってきました。

今日は東京都におけるということで、実は僕、大阪からやってきました。住んでいるのが大阪でして、ただ東京は、週に3日以上、東京にいますので、東京について思うことというのをいくつか書きました。

1つ、人口増加時代、少し振り返ってみたいと思います。

高度経済成長期、人口や市場、税収、どんどん拡大しました。都民への公共サービスがどんどん充実させられたと。ハード中心かもしれませんが。さきのオリンピックのときのレガシーが、かなり我々の生活を豊かにしてくれたのは事実だと思うんですが、2点目のポチですね。東京が便利になればなるほど、都民はお客様のようには振る舞うようになってきたというのが、これ東京だけではなくて、実は僕、全国の問題意識だと思っています。

いいことなんです。便利になったのは、とてもいいし、至れり尽くせりになったのはありがたいんですけども、かつてのように自分たちの街は自分たちで何とかしようと、その中に楽しさを生み出していこうと。先ほど知事がおっしゃったように、楽しいということと、それから街を自分たちの手でマネジメントしていこうという気持ちが江戸時代ぐらいまではあったような気がするんですが、これが特に戦後ですね。もう行政に電話して、「落ち葉掃きに来い」と言ったり、要望・陳情型の都民が増えたんじゃないかなというふうに思ってきました。

「都庁はよく耐えた」って書いてます。なるべく要望に応えるようにしたんじゃないかと思えますね。しかし、それ、「よく耐えた」と書いているのは、要するに、それができたのは人口や市場や税収が拡大する時代だったからなんだと思うんですね。もちろん、都庁の職員がいろんなことやるし、それから外部の業者に発注して何かやってもらうことありましたが、至れり尽くせりができたのには、できた時代背景が多分あったんだろうと思います。しかし、これからはそういう時代ではなくなるというのは、皆さん、ご存じのとおりだと思います。人口が停滞期、あるいは東京であっても減少するという予測が、かなり先には出てきているという中で、税収が減っていくし、高齢化していくというときに、都民がいつまでもお客さん市民であっていいのかどうかというのが問題だというふうに思います。

日本を代表する超高齢都市になっていくであろう東京の中で、どういうふうには振る舞っていくのか。実は先進国の都市部は、緩やかに高齢化していきますので、東京のこれからというのを多分注視しているだろうと思います。

特に、これまでの医療、介護、福祉、あるいは薬事を入れてもいいかもしれませんが、先ほど知事がおっしゃったような地域包括ケアなんかも、実は厚生労働省、出したんですけれども、具体的な方法がわからないですね。しかも、その中に美しい、カッコいい、おしゃれ、かわいい、美味しい、いわゆる楽しさの部分を入れ込む方法に至っては、ほとんど現場の人たちは、まだ発見できてない状態だと思います。これを今までどおりやってしまうと、これ、「もぐらたたき」という表現がいいかどうかわかりませんが、とにかく地域に帰って、状況が悪くなって、また病院に来て、これ治すんだけど、また濁った水の中に魚を戻して、また状態悪くなってって、こればかりになりますから、ケースワークとかグループワークだけじゃなくて、コミュニティワーク、つまり住んでる場所自体を健康にしていかないと、後から後から病院に来て、そして福祉施設に来ちゃうということになります。これは予算が足りないというのは、生産年齢人口の変化を見ててもわかることだと思いますね。「ケース、グループからコミュニティへ」と一番下に書いてますけれども、ますますこれは医療、福祉の分野でもコミュニティということが大事になってくるんじゃないかなというふうに思ってます。

次のページに、「保健？ 予防？ 健康づくり？」というふうに書いてますけれども、実は、そのお世話になる前の状態がすごい重要なんじゃないかと思ってますね。医療や介護や福祉にお世話になる1つ前ですね。その前、健康な状態のときに地域の中で結びついて、外に出て笑顔になったり、一緒に活動しようとか、やる気になったりする。ここすごく大事なはずなんですけれども、先ほど来、便利になればなるほど、ボタン1つでいろんなことができるようになって、協力する必要がなくなってきたので、孤立化していて、いざお世話にならなきゃいけなくなったら、1人ずつ施設にお世話になりに行くと、これを都庁はこれからもずっと面倒を見続けるというふうにできるかという、多分これはいろんな意味で難しくなるんじゃないかなと思います。なので、この分野のことを言うと、まさに保健や予防や健康づくりが大事だということになるんですが、これ、全ての施策で何か人が友達になったり、つながったりするきっかけをつくらないといけない。これは土木も例外ではないだろうし、農村整備も例外ではない、産業振興も例外ではなくて、この特定の厚生労働部局だけではなくて、みんながふだんから都民が結びつくきっかけをそれぞれつくっておかないと、大きな意味で将来の厚生労働、どうしていくのかということは考えられなくなるんじゃないかなと思っています。

一番下に「いいことやってるんだろうけど、何かつまらないね」って、若い人たちの感

覚は、自分たち、まだ健康な時期が長く続きますので、「うーん、確かに高齢化だしね」とか、予防とか健康づくりとか大事な気がするけど、でも何となく、何かしょぼいというか、ださいというか、そういうとこ、あんまかかわらないという感覚が多いような気がしますので、この部分、カッコいいとか、おしゃれとかいうことは瑣末な問題のように見えて、結構、人が共感してつながっていくという意味では、すごく大事な点なんではないかなというふうに思ってます。

次に書きましたけども、保健分野が美しさ、持つということですね。美しい、楽しい、おいしい、カッコいい、こういう要素をどういうふうにしていくのか。

ただし、これが表面的なだけでは持続性がないだろうと思うので、その美しさによって共感が生まれるとすれば、どういうふうに人と人をつなげて、どういうふうに健康維持、あるいは見守りを、あるいは災害時の助け合いを実現させていくのかというのが大事だと思えます。

まさに2040年、先ほど知事は若い人たちを、今、呼んでくれたとおっしゃいましたが、我々が高齢者になりますので、この我々、2040年に僕らが演歌を歌ってるかどうか、よくわからないんですよ。盆栽育ててるかどうかもわからないんです。グループホームで塗り絵やりましょうねと言って、塗り絵やってるかなというと、想像できないですね。ちょっと多分、僕らは違う方向に行っちゃうんじゃないかと思うんです。もし、そうだとすると、東京都が便利な街になって、誰にも頼らずに、あたかも1人で生きていけるかのような幻想を抱くようになったのがこれまででしたけれども、多分これからは、2040年、1人で生きていくなんていうのは無理だったんだということを理解する人が、これからどんどん出てくるんじゃないかなと思います。そのとき都の政策、あるいは事業がどうあるべきかというのは、これ、もう大住民参加時代に入らざるを得ないんじゃないかと思ってます。美しさというのがまずないと、「住民参加いいことだけど、ダサイよね」では、参加してくれないだろうと思います。楽しいことをしてたら、人がつながって健康になれたというのが理想的なんじゃないかなと思ってますね。

その下にいくつかデータが出てるといので書きました。孤独は喫煙よりも体に悪いということがわかってます。禁煙するより友達つくったほうが寿命延びるそうです。

お見舞いに来てくれる人の数で寿命が変わるらしいので、友達いないのに入院しても、多分、寿命延びないだろうと思いますね。お見舞い来てもらわないとしようがない。

町内会の役員は健康にいいということがデータで出ているそうです。これをちゃんとわ

かった上で、ちゃんと参加するかどうかは大事ですね。

つくり笑いでも寿命は2年延びるらしいです。本気で笑ったら7年延びるそうですよ。なので、つくり笑いでもいいから、とにかく出て行って、つながって、笑って、健康寿命延ばして、平均寿命に近づけていく、これすごい大事なんじゃないかなというふうに思います。

その次のページは、その出どころですね。石川さんという方が書かれた本の中に、そういうことが書かれていて、実は海外の研究では、もう既にそのことが明らかになっているということのようです。

その次ですね。活動人口という言葉出しました。定住人口、交流人口という言葉はありますが、活動人口、これは造語です。都のために、街のために、みずからまちづくりの活動に参加する人口比率を上げられないかなと思ってますね。無責任、要望・陳情型の都民ばかりになってしまうのではなくて、自分たちの街のことぐらいいは、楽しく友達たちとつながって、自分たちでマネジメントしていこうやというふうに思う人たちが増えれば健康的な街になっていくんじゃないかと思えます。

中間にある2020年のオリンピックは、そのための大きなきっかけでしょうね。美しい、楽しい、カッコいいというのを、このとき表面的に終わらせるんじゃなくて、都民が参加して、その後のまちづくりにもかかわるようなきっかけをオリンピックのときにつくり出すことができたらいいな。それが前回のハードのレガシーとは違うレガシーですね。「2020のときに都民のつながり変わったよね」って将来言われるようなレガシーを残すことになったらいいなと思ってます。

「大住民参加時代へ」と書きましたけれども、あらゆる施策を住民参加で検討していく。そして、それによってつながって、先ほど高齢社会になっていくであろう東京都を豊かな街にしていくことになるんじゃないかなと思ってます。

最後の図は、これ実は夢ですね。これから先、オレンジ色のほうですけれども、活動人口比率がぐっと上がっていくという街になったらいいなと思っています。残念ながら、これまでのところ、戦後、アメリカの個人主義の影響もあるんでしょうか、自分さえよければですね、他人に迷惑かけないように生きていけばいいだろうというふうに生きてきたようです。なので、活動する人口というのは、かなり減ってきちゃったんじゃないかと思えますね。かつては結とか講とか連とか座という言葉を使って、自分たちの街のことは自分たちでやろうぜというふうにやってきたはずなんですけれども、これを行政に、税金払っ

てるんだから、もうお任せだという状態に、1回、低くなっちゃった。できるならば、2040年、2050年に向けて、この活動人口比率を東京都の中でもう一回上げることができ。これ、目に見えにくいことだけれども、やっぱり動き出す都民がたくさん増えていくことによって、都の財政ももちろん助かります、各種施策も住民参加で進められますが、広い意味では、これが健康づくりにつながっていくというふうに思っていますので、僕の中からの提案は、今、まちづくりセンターとか、いろいろ閉鎖になったりもしているかもしれませんが、もう一度、新しい役割として、都民が参加して、この都を考えていこうというような街に変わっていくということを提案したいなと思っています。

一番最後ですね。これはもう時間が来ましたので、ざっと言いますけれども、ファシリテーターというのは結構大事になってきます。ほんとうに専門職のように、建物を建てるのに大工さんが要るように、人々のつながりをもう一度紡ぎ直すためには、このファシリテーターの人たちを増やしていくということが、「東京都って、その最先端だね」というふうに言われるように、住民の間を紡いで、政策を立てて実行していくような応援者を増やしていく必要があるんじゃないかなと思います。

下から2つ目ぐらいに、コミュニティデザイナー、ファシリテーター、ワークショップデザイナーなど、「つなぎ屋」と言われる人たちをうさん臭い人だと思わないようにすること、これ大事ですね。こういう人たちが我々の仲間だと思って、都民一緒に巻き込んで、都をつくっていく、こんな先進地になることを夢見ています。

時間が来ましたので、僕の話提供は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

**【前田副知事】**      ありがとうございました。

それでは、続きまして、工藤和美様より、ご説明をお願いいたします。どうぞよろしくをお願いいたします。

**【工藤様】**      順番ですので、工藤がスタートさせていただきます。

私、建築家としても仕事をやっておりますけど、まちづくりや、行政にかかわったりする事もしております。最近の特区の選定委員として東京都の方々ともお会いしていますけれども、この特区の選定委員をやることによって、全国で起きている問題を身近に知ることができて、とても勉強になりました。

改めて、この東京都という都市を見渡すと、ほんとうに山間部から海まで、ある種、日本が抱えている問題。都市、田舎、島、全ての事を、東京都が背負っているなと感じてい

ます。それぞれに解が出るとすれば、これは日本の解になるというふうに私は思っています。

私からの提案は「東京にデザインを」ということです。今、山崎亮さんの話を引き受けるような順番にたまたまなっていますが。実は、たくさん良いことをやっているのだけでも、それが表に上手に出ない。なぜかというとは、プレゼンテーションが下手だからです。そこでデザインの力を使えば、みんなをハッピーにできるんじゃないかということを、お話しします。

次のページ。

今、東京のターミナル駅、次々と新しくなっています。超高層群が新宿にできて、東京都庁が移動して、ビジネス街として一番最初に輝いたところではあったのですが、一番最初にできたということは、今や一番古くなっているということです。新宿の街が、2040年に一体どう変わり切れるかというのは、大変重要だと私は思っています。

次に挙げる例は、皆さん勿論ご存じの“タイムズスクエア”や“清溪川”の変わり方です。どうしてこんな事ができたのか、それは実は強いリーダーシップがあったからです。誰かがやれって言ったら、やれるんです。みんな賢いし、できるんですよ。だけど、やれって言わないんですね、皆さん。私は都市は強いリーダーシップで変わると思っています。

二つ目は、街ってほんとうは楽しいはずなんですよ。都市政策でいうと過密な、街にゆとりを持たせる。、要は公開空地を使って、インセンティブとして容積上げながら、地域の人たちの生活をよくしようという都市中心部の考え方。こういうシステムを取り入れているにもかかわらず、これをやっては、だめ、だめ、だめだめっていうサインをずらっと並べるんです。本当は「周りの人に迷惑かけないでね」で済むはずなのに。後からクレームを言われたくないので、全部バツバツバツって。これじゃ楽しいまちづくりはできないんじゃないかと思います。

例えば、次のページにあるような、海外を見れば、有名どころでいうと、ポンピドゥーセンターの広場、ロンドンのシティホール、バルセロナのレイアール、つまりその都市に行ったら、あの広場に行ってみたいという場所があって、そこには先ほど言うバツバツバツをみんなやってるわけですよ。しかも危険じゃない。もうちょっと人を信じましょうということでしょうか。

では、次のページを見ていただくと、皆さんがいつも見ていらっしゃる東京都庁の広場です。特別なイベントのときは、確かに何かやってらっしゃいますけど、ふだんはこうい

う状態ですよね。新しくできた公開空地なども、基本的には何もしないでほしいという気持ちがあふれていたりします。ましてや、私は都庁のいつもロビーに免許書きかえに来るたびに、何でここで免許書きかえなくてはならないんだろうかと疑問に思っています。おもてなしの心に欠けているような場所じゃないでしょうか。建築基準法上正しいのかとか思ったりするほど仮設的な空間になっています。

では、デザインがどんなことに有効かという、今回ご説明に来られて、こういう資料をいただきました。つまり都でつくった分厚い資料と、コンパクトなきれいな資料。誰が見ても圧倒的にいいでしょう。これはやっぱりデザインの力なんですよ。難しいこといっぱい書いても、みんなわからないし見たくない。でも、コンパクトにやって、エッセンスをきちんとデザインの力で伝えるという、まさにご自身たちがやられている、やり方をどんどん広げていってほしいですね。つまりデザインというのは、見え方だけではなくて、実はその本質をどう抽出するかというところまで含めて、デザインだと思っているので、多分、これはエッセンスとして非常に重要なところを引き出している。それで美しくて心地がいいという、あらゆることに質の高いデザインを東京が行えば、多分、先ほど知事がおっしゃった世界ランキングは上がると思います。

例えばの例を、お見せしましょう。これは金沢、46万の都市です。ここに2つの公共施設があります。左側は私が設計した海みらい図書館、右が妹島和世さんが設計した21世紀美術館、この2つの図書館と美術館に年間80万人、150万人を超える人たちがやってきます。観光客だけではないです。市民がたくさんやってきます。46万人の都市ですよ。それだけの人たちが、それも世界中からやってくるということ、それってとても重要なことだと私は思っていて、やはりデザインのすぐれたものをつくることによって、人々は、喜び、幸せを見出す。

自分が手がけた例を言うと、ただデザインがいいだけじゃなくて、今の時代は、環境や、エネルギーなど、全ての面に対して、すぐれた状態のものをつくり出すだけの力が、今、日本の建築にはあります。例えば、この図書館では6,000個のペアリングガラスを外壁につけていて、自然光だけで読書ができる空間になっています。それによって、空調や水道、電気等の消費エネルギーが通常の公共施設の2分の1ですんでいます。多分、この都庁舎と真逆かもしれません。

さらに、公共施設で、よく言われることですが、目的外使用を禁じる。すごくもったいないと思います。建築を箱物と言っていじめられることもあります。金沢海みらい図書

館に、ケーキの箱というタイトルをつけました。ケーキだと、中にすてきなものが入っていて、幸せな気分になる、この写真はリチャード・ストルツマンさんで大変有名なポストン在住のクラリネット奏者です。御夫婦で、来日された時に、図書館を、見たいと。案内する計画をしていたら、やっぱりこの空間で演奏もしたいと言い出しました。そこで館長に頼んでサプライズコンサートを開きました。すばらしいコンサート会場になりました。公共施設が何倍も有効になります。 次の頁は、先ほど山崎亮さんがおっしゃったことに重なりますが、これからの施設というのは、建築を建てるだけじゃ絶対だめだということ。 どうやって維持管理していくか、そしてどうやって運用していくかというところが、大切 です。この下にある人の一生ですけれども、大体生まれて20歳ぐらいになるまでは、いろいろな形で公共サービスがバックアップします、教育を含めて。今問題なのは、この65以上のリタイアメントの人たちが、アクティブなシニアたちが、どうやって生きがいを持って、立派に生きていくか。この年齢の人たちが、まさにこの公共施設の維持管理、運営にどんどん入ってきてほしいと私は思っています。

先ほどお見せした金沢の図書館も、美術館も運営に様々なボランティア市民が参加してらっしゃいます。そういう時代にしていけないといけない。

次の例ですけれども、私は学校施設の設計を多く手がけています。公共施設の約37%を超えるのが学校施設と言われています。学校というのは、やっぱり地域に根差していて、ピープルマグネットという言い方がありますが、人々が寄ってくる場所になるんですね。その場所で、例えば、左上でいくと、人口ゼロだった埋立地に、この打瀬小学校ができたことで、2万4,000人の街が20年で完成しました。この学校がなかったら、多分、成功しなかったと言われています。その下にある博多小では、中心部の市街地の人口はどんどん減ってしまって、もう1つの小学校60人までになって、複式学級直前でした。4つの小学校を統合して、今や予定していた生徒数の倍まで達しました。

右上は富山市で、コンパクトシティ化で有名になりましたが、中心部を小・中連携校にして、人々を集めています。最後、ローカリティと書いているのは、熊本の山間部の街ですけれども、地元の材を使った学校が、また人々を支えています。

それがなぜ学校かということ、次の学校基本調査の表を見てください。知事の年齢にちょうど合っています。知事が中学2年生だったときが日本における中学生人口のピークです。そして今、去年ですけれども、中学生の数がそのピークの半分になりました。人口統計というよりも、自分が中学生だったときと比べて、子どもたちの数が半分と言ったほうがわ

かりやすいと思います。こうなってきた社会を、これからどう支えていくか。次のページですが、つまり人が少なくなってくる中で、いろんなことを判断するのに時間をかけ過ぎている。日本の社会は実に丁寧だけど、もう限界です。ここに書いたように、都庁の皆さん、ここに並んでいる方々が、庁内で判断を下すのに、2人以上の判断を仰いだら、もうペナルティ。つまり1つのことにオーケー、いや、ノーと言うのに、5人も6人もたくさんセクションを回って、やっと1つのイエスを出すという、それはまずいんです。もう次の世代は半分しかいない。みんなでそんなことをやっていたら、とても追いつかない。経済もダウンしてしまうし、やる人すらいなくなる。もっとスピーディーに。だから判断をするときに、2回以上しないというようなルールを決めて、それをやらなかったら、ペナルティ。ここに座っておられる方々、みんな給料下がるよぐらいな勢いでやっていただくと、庁内をとにかくスリム化することは、少子化の社会の変容に関わってくる。

これはニューヨークのブルームバーグ市長が行った例ですけれども、やはり何か質の高いものを、デザイナーを選ぶときには、もう入札のような、安かろう悪かろうという昔のやり方やめて、ほんとうにいいものを選ぶというような選び方に、変えないといけないと私は思っています。

今言った事を総括すると、要は引き算をしましょうという事です。高度経済成長では、いろんな足し算をしてきました。1個ずつ減らしませんか。いろんなことをテクニカルな面がサポートしてくれ、引いていっていいんです。それを私は食品会社の方にききました。昔は添加物を入れて品質を保つという方法をとってきましたが、今は1個ずつ添加物を外して、技術によって無添加ができるようになった。まさに日本もそうならなきゃいけないと思います。最後、東京都はもっと木のある、木造、木質感のある、優しい環境をつくってほしい。大きなものは大変でも、小っちゃな、ちょっと池の周りを整備してあげれば、もう子どもたち、幸せな顔になれる。

イタリアの、レッジョ・エミリアという都市では、工場から出る産業廃棄物を集めてアートの材料を供給しているレミダというセンターがあります。子どもたちの教育も結果ではなくてプロセスを重視するという取り組みをしています。最後ですが、大学と埼玉県鶴ヶ島市と企業の産官学でやったプロジェクトです。このプロセスを全公開でやりました。市民のニーズを聞き、それに応えて設計して、それをまたみんなで見る。当初2,800万という予算でスタートしましたが、実際設計を進めたら6,500万まで上がりました。どこかで聞いたような話ですけど。それが最後は2,900万のところまで下がりました。減

額ワークショップってやったんです。左側がやっている様子です。お金も設計案も全部見せて、地域の人も納得して、じゃあ、これはなくしましょうという形でやったプロジェクトで、皆さん、幸せになっています。隠さない開かれた社会にしたいというふうに思っております。

以上です。

【前田副知事】 どうもありがとうございました。

では、続きまして、前田展弘様より、ご説明をお願いいたします。よろしく申し上げます。

【前田様】 ご紹介いただきましたニッセイ基礎研究所の前田と申します。本日は、このような貴重な機会を頂戴いたしまして、まことにありがとうございます。

私、高齢社会全体を研究対象としておりますGerontologyを専攻しております、本日は、これからの高齢化にどのように向き合っていくのかという視点で、これからの東京を考えていきたいと思います。少しシリアスなテーマになって、ちょっと雰囲気を変えてしまうところがございますけれども、おつき合いいただければと思います。

まず、高齢化の話といたしますと、とにかくネガティブな暗い話が多いわけがございますけれども、私はポジティブに捉えているんですね。実際、日本というのは、ご承知のとおり高齢化の最も進んだ最先進国です。ご覧のデータにもございますように、これからも世界のフロントランナーとして歩いていくと。同時に、市場という見方をしましても、世界の人口というのは、これからこの人口爆発というのが想定されておりますけれども、その人口爆発に伴いまして、地層のような、帯グラフの高齢者人口というのは爆発的に増えていくわけです。ですので、このことから、先ほど山崎さんも触れられておりましたけれども、高齢化に伴うさまざまな課題の解決を世界各国が日本に期待しているわけで、その課題の解決策を提示することというのは、日本社会の国際的な価値も高めますし、経済的な発展というのも十分期待されるということです。特に日本をリードする、この東京がその課題解決の先頭に立っていただくということが、私として非常に期待しているところでございます。

次に、今回、「2040年の未来」ということでお題をいただきまして、目指すべき理想の社会というのがどういう社会かなということをいろいろ考えてきたわけですがけれども、突き詰めますところ、いい社会というのは一人一人の都民、国民の方が、まさに幸せ、安心して幸せに暮らしていける社会だと思っております。そういう中で、特に現代社会という

のは、高齢期の将来不安が払拭できないわけでありまして、では、どういうふうになれば、よりよく生きられるかというところでは、私含めて、Gerontologyの研究をしている人間としましては、高齢期にほとんどの人が訪れる3つのステージを、よりよく生きていけるということがポイントだと考えています。

時間の関係で、データの詳細をお話しできませんけれども、大きくステージⅠ、Ⅱ、Ⅲは、まだまだ元気で活躍できるステージⅠ、それから体力的にも少し落ちてきて、しんどいなど、さまざまな変化が訪れるステージⅡがあり、そして最終的に医療、ケアにお世話になるステージⅢというふうに分けた上で、現実を見ますと、ほんとうにまだ60代、70代の方も元気でバリバリ活躍できる方はたくさんいらっしゃる。ですけれども、社会でその活躍できる場がないという状況ですね。徐々に、いわゆる健康状態、自立度が変化してきた中で、いろんな困り事も増えていきます。また80歳になっても、90歳になっても日々楽しみたいわけですがけれども、なかなかそういう80代、90代の年代の方には、社会のアプローチとして、楽しみを提供するという視点がちょっと欠けているんですよ。そういうところでの社会的なサポートが不足していると思います。

そして最終的な医療とケアが必要になる時期。これは、ちょうどこのところ、増田先生の報告でも、首都圏の医療介護の供給問題が取り沙汰されておりますけれども、ほんとうに2040年に医療と介護のサービスを受けられるかどうかということは非常に不安なわけですね。ですので、このそれぞれのステージにおける課題を解決するということは、2040年の未来を創造する上での大前提になると考えています。

少しくどくどしいですがけれども、ほんとうに人生、もう100年時代です。これは2040年でしたら、もう少し延びているかもしれませんが、寿命が延びて長生きできるようになったことはいいことですが、よりよく、まさに生き抜くということは、ほんとうに今でも大変です。さらに未来のほうがもっと大変になるかもしれないです。ですので、先ほどの3つのステージの課題解決ができない場合は、ちょっと言い方はよくないですけれども、もう長生きを否定するような、自殺大国でしたり、難民大国、孤独大国と、そういう社会になりかねないという危機もあるわけです。何とか加齢に価値ある社会、笑顔あふれる未来社会を創造していくということは、ほんとうにやっていかないとはいけません。

あと一言、私、高齢社会のことを取り扱っておりますけれども、高齢期の生活をよりよくするということは、若い世代の希望につながると思いますか、希望を与えることだと思います。

うんですね。そういう意味でも、何とか高齢期の生活をよくしていくということが大事だと思っています。

以上を踏まえまして、私なりのグランドデザインとしましては、人生100年の長寿を最期まで安心して豊かに暮らしていける社会というふうにさせていただきました。特段、目新しいことを言っておりませんが、こうした当たり前の理想を実現できないというのが現実なわけで、それは2040年になったからといって、このことが実現できているかといえば、非常に危ういと思うんです。ですので、あえてこのテーマでさせていただきました。

実際のグランドデザインの要素としましては、先ほどのステージ、3つの課題を解決することが大事です。そのためには、いろいろな項目を挙げさせていただいておりますけれども、3つのイノベーションを実現するということ。また、そのイノベーションを推進する社会教育というのが大事だと思います。やはり制度だけを変えてもだめです。やはり個人の生き方、人生100年を前提とした生き方に、まさに変えていかないといけないわけで、この4つのことを強調したいと思います。

あと、それぞれの項目も、ポイントだけといいますか、コンセプトだけをお話しさせていただきますが、このステージIの、まだまだ元気で活躍できる期間には、セカンドライフ、もしくはもうサードライフになっているかもしれませんが、セカンドライフを支援するシステムを地域社会の中に実装することが必要だと思います。シルバー人材センター等の機能発揮ですとか、現在の政策はもちろん承知しておりますけれども、それだけでは全く足りないと思っています。かなりお節介なことにはなりますけれども、一人一人の個人のセカンドライフに、かなり積極的に社会が介入して、社会とつながってない人がゼロになるぐらいに、システム的に地域社会への参加を促すことが必要だと思います。そういう中では、例えば、セカンド小学校ということも書かせていただいておりますけれども、50歳なり60歳になったら、小学校と同じように、地域社会の中の1つのコミュニティに集まり直すと、それぐらいのことがあってもよいと、未来社会としては必要ではないかなと思っています。

80代、90代のさまざまな変化期がある、このステージの課題対応としましては、ここはシルバー・イノベーションと書かせていただいておりますけれども、ポイントは、いかに企業、民間の力をここに導入するかということと、元気なシニアの方が老身のシニアの方を支えるという仕組みをつくる、この2点にあると思っています。私も東京大学の活

動の関係で、多くの、延べ100社の企業の方とおつき合いしておりますけれども、なかなか高齢化課題に積極的にビジネスに入ることに二の足を踏む企業さんは多いです。そういう意味でも、80代、90代のシニアの生活、自立した生活を支えるための民間の力を引き出すような施策というのが非常に求められると思っています。

もう一点、この間におきましては、これからひとり暮らしの、特にご年配の高齢者が増えていくわけですね。誰か1人寄り添える人がいるかないかで、その人のQOLというのは全く変わってくるわけで、それこそマンツーマンディフェンスのように、地域社会の中でサポートする、そういう人をつけることが大事だと思います。保健師さん、民生委員さん、皆さん頑張られておりますけれども、量的にも足りないですね。そういう中で、元気なシニアの方が老親のシニアの方を支えるという、こうした仕組みも必要だと思います。

最後になりますけれども、最終的に医療、介護が必要な場合、こちらはいろいろ考えましたけれども、かなり現実的な話になりますが、地域包括ケアシステム、こちらをまさに実効的なシステムとしてつくれるかどうかというところが大きなポイントだと思います。国の政策としては、2025年を1つのゴールとしてはおりますけれども、今現在も、理想のケアシステムがどうつくれるかというのは、まさに不透明な状況にありまして、ですので、2025年、またその先の2040年には、このシステムが地域の中でより良く機能しているということを理想と考えます。

以上、かなり現実的な話ばかりになっておりますけれども、よりよく人生100年、長寿を生きるためには、ほんとうに今の課題でもありますが、未来はもっと深刻な課題になるわけで、ここの高齢期の3つの生活ステージ、これをよりよく生きられるように地域社会としてサポートしていくということが大事だと思っております。

ご清聴、どうもありがとうございました。

**【前田副知事】** どうもありがとうございました。

それでは、続きまして、椎名林檎様より、ご説明をお願いしたいと思います。よろしくお祈りします。

**【椎名様】** よろしくお祈りします。このような立派な先生方にまじって、ほんとうに恐れ入りながら、少しだけおつき合くださいませ。

芸を志す者は、「一日サボれば己にバレる 二日サボれば師にバレる 三日サボれば客にバレる」と申しまして、幼少期から日々隠れて稽古を積むものです。こういったことを

苦しめない、我が日本の子どもたちは、今や世界中、あらゆる楽団で首席奏者に選ばれ、コンサートマスターですとかトップですね。各バレエ団でプリマとなり、全世界ヒットするレコードや賞で伸び伸びと演奏し、作編曲したり、それぞれに伝説を生み出すような大人へと育っています。あまり知られていないながら、現場ではよく知られていることで、動かしようのない事実です。

ちょっと、お一人お一人紹介しましょうか。RIE TSUJIさんというプレイヤーは、ピョンセのステージで演奏されたりしています。BigYukiさんも、Q-Tipって、日本の若者の大スターでもありますけど、そういう方のところで演奏している。お二人とも鍵盤とか編曲の達人です。AyaBambiは私とも一緒に仕事してくれていますが、今、マドンナさんにとられてしまって、なかなか帰ってきてくれなくて、ちょっと困っているんですけど、それぐらい大活躍のダンサー。三宅純さん、日本でもずっとご活躍ですけど、ピナ・バウシュの映画の音楽なんかさったり、フランスでは一番有名な日本人なんじゃないかという作曲家の方ですね。などなど、ほんとうに挙げ切れない方々が格好よくご活躍です。

では、日本が、というか東京は、いわゆる「KAWAII」というポップカルチャーのみならず、もともと欧米で栄えてきたカルチャーをも内包した文化全般の本場であると胸を張るべきではないでしょうか。

東京は芸事の本場、これを我々自身が、ひいては諸外国の皆さまがはっきり認識するために今足りないものは何か。それは本場の、文字どおり場所、シーンであると私は考えます。というか、皆さんおっしゃっていることですが。惜しまれつつも今年引退するシルヴィ・ギエムはじめ、ピナ・バウシュら、世界のトップスターが指定する会場は、例えば、さいたま芸術劇場、川口リリアなど、近郊には幾らかありましたけど、東京都内には十分にはないようです。渋谷にはNHKホール、東急Bunkamuraなど、興業団体にとって、私たちにとってですね、非常に使いやすい、よい劇場が集中しております。文化発信地、いわゆる芸事の本場たり得るムードが既にあるかと思います。丸の内国際フォーラムなんかも音響の面で非常によい劇場です。こうした元来利便性が高くて、我々市井の民にとってイメージの広がりやすい、あらかじめ期待値の高まっているエリアも、さらに奥行きのある文化的な名称にすべく、何か働きかけられないものではないでしょうか。

諸外国で活躍する、先ほどご紹介いたしましたようなトップランナーの日本人の方々が凱旋公演を行うホーム、本拠地が必要です。また、現状、首席とまでは言わずとも、既に十分に力を蓄えた次なる演奏家や舞踊家などが常時生実演を提供する場にもなるでしょう。

さらには、資料出てますけど、北斎、光琳らの言わずと知れた名画などをアニメーションの精鋭チームに動かしてもらって、例えば、それを背景に、玉三郎や七之助が古典を踊るとか、そういった芸当は、我々日本人だけがご用意できる演目ではないかと想像しております。

理想としては、しかも敷居が低く、誰でもごく気軽に体感できる場であってほしいものです。旅疲れされた海外からのお客様をリラックスいただいたままご案内できる自慢の名所がまだまだ乏しいと思っております。

コンテンツ、演目自体は手の込んだものでありながら、人々がそこへたどり着くまでの気楽さとか利便性には何としても重きを置きたいところです。

利便性といえば、2045年に迎えるとされるシンギュラリティ（技術的特異点）のお話も、やはり無視できません。既に皆さんちょっとおっしゃってましたけど、我々の能力はコンピュータありきのものへと変化しつつあります。それでも、とにかく東京では2020年、五輪開催も予定しております。ついては文化活動も盛んに行わねばならない。どうしたら、この翻訳しづらい日本特有の美点や文化を国内外へPRしたらよいだらうかというようなお話を、あちらこちらで耳にして。

意見を求められたりもする中、私はさきに申しました、東京を芸事の本場というふうになんとも呼びたいという思いをいよいよ結実すべく、ある考えに至りました。

きっかけは、資料が手書きでちょっとお粗末なんですけど、フランス車のニュースでした。シトロエンDSという車が、古きよき時代のデザインと最新の技術を組み合わせたオマージュモデルを発表するという話でした。何とすがすがしい取り組みかと、私は嫉妬しまして、歳月を経て今なお古びない意匠と、先ほど工藤先生もおっしゃっていましたが、デザインというのは、やはり本質だと思うんですね。それと確かな利便性が融合されたもの、両極に聞こえるようすけれども、そういうものを掛け合わせて、いいとこ取りするということにかけては、日本こそ世界のリーダーシップを担えるのではないのでしょうか。

そもそも、我々はいつから新しかろうよかろうと即物的に物事を捉えるほうへ偏ってきってしまったのでしょうか。今回、議題に上っている2040年、それまでに1度、我々が前提とすべきところを見直す機会を設けようではないかというふうに考えました。

舛添知事もおっしゃっていたように、本来の我々らしい注文の多い人生を、おもしろおかしく工夫していこうというような我々らしいクリエイティビティ、そういうものを取り戻すために、東京万博2020というものを開催できないかと。東京の一等地を万博跡地

にできないか、そういうふうを考えるようになりました。現在いろいろな方々と、ちょっとお話ししているところです。

万博といえども、万国にご参加いただく博覧会を想定しているわけではなくて、東京の先ほど申してまいりましたような文化的拠点づくりをドラマティックに進めるべく、一役買ってもらうための呼称にすぎません。各企業、団体、また個人へ、ある共通の目的を、目標を達成してもらう純然たる文化祭になればいいなと思っております。

肝心のお題については、このように考えております。「この半世紀に我々がつくった宝物を子どもたちへ託そう」です。開催地は、つまり機能し続けるタイムカプセルとして、以後、半永久的に残したいと思っております。つまり、誰もが壊したくないもの、失いたくないもの、子どもの子どものそのまた子どもの代まで残したい、はなからそう望まれているようなものだけが存在する、それがすなわち万博会場ということになります。例えば、私は劇場として機能するパビリオンを担当したいと思っております。同時に、隣接するさまざまな施設も、各々にとって取っておきの宝物ばかりだったらどうでしょう。訪れる人々がひらめきと想像の原点へ瞬時に立ち返ることのできる、そんなエリアができるかもしれません。ぜひ、多くの方の夢が実現されたプロジェクト、エリアにしたいと思っております。

我々が誇るべきは最先端テクノロジーだけではありません。利便化一辺倒で文明を邁進させた日本は確かに豊かです。しかし、我々がほんとうに豊かなのは物理的理由からだけではありません。物の哀れを知る感受性という財産を持つからです。これを翻訳できる方は、果たしていらっしゃるでしょうか。言葉で訳せないのならば、それを丸々体感できる場、言うなれば「粋の本場」を、ほかならぬ、ここ東京におつくりするのが一番の近道ではないか、そのように考えたのであります。

便利ということの対極にある地道な稽古、それを日々積み上げる子どもたちの目指すべき場が、日本の首都東京に存在してくれたら、私は日本人として、何より母としてうれしく思います。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

**【前田副知事】** どうもありがとうございました。

それでは、引き続きまして、猪子寿之様より、ご説明をお願いします。どうぞよろしくをお願いします。

**【猪子様】** こんにちは。チームラボの猪子といいます。分不相応なのは知っているので許してください。

後でつながってくるので、先にどういうことをやっているかというのを、ちょっと簡単に説明させてください。

これは2013年にシンガポールビエンナーレというところで発表した作品、資料の2ページにある「秩序がなくともピースは成り立つ」です。等身大のホログラムが空間にいて、その空間の中を歩いていけるっていう。ホログラムによって映し出された人々は、自立していて、観客に反応しながら楽器を奏でたり踊ったりしている、そういうアート作品です。これはすごい話題になって、現地の最有力紙「ストレートタイムズ」の1面になったり、シンガポールの首相が、わざわざプライベートで来てくれたりしたりしました。

これは今年のお正月にフランスのMAISON & OBJETというデザインの流通見本市みたいなものがあるんですけども、流通金額が世界で一番大きいところで、そこが20周年で、それを記念して、エントランスにつくったインスタレーション、資料4ページにある「Espace teamLab -World Unleashed and then Connecting-」です。こういう巨大なテーブルがあって、空間も全部映像になっていて、どういうふうになっているかという、いろんな器があるんですけども、その器をテーブルに置くと、こんなふうに器の絵柄がテーブルの上に出ていって、世界がどんどんつくられていきます。器は、自由に、テーブルの好きな場所に置くことができます。それぞれ出たものは互いに影響し合っていて、人々のふるまいにも影響を受け、一つの世界を創っていきます。すごく大きなテーブルで、いろんな人が御飯を食べているんですけど、自分が置いたお皿や、今テーブルに置かれている他の器から何か出て、例えば、自分のお皿から鳥が出たら、向こう側の他のお皿から出た木の枝にとまったりします。基本的に関係ない人同士ですが、互いに一緒の場所にいる人たちを意識し合ったり、何となく普段より和やかになるような。そういうことをやっています。

また、去年、ニューヨークのPace Galleryという名門ギャラリーで、資料3ページにある「teamLab: Ultra Subjective Space」をやりました。アメリカでは初めてでしたが、チームラボは無名なのに、チェルシーが結構満杯になるぐらい人が来てくれたりして、Pace Galleryの夏のエキシビション史上では最も人が来てくれました。

そういうことを、いろんなアートをつくりながら、世界中でやっていますが、何でこんなにいろんな、どこの国に行っても、別に僕らは無名なのに、人が来てくれるのかと思ったら、グローバルシティというのは、いろんな国の人が集まっているので、どこかの文化、ハイコンテクストではなくて、言語などにも依存せず、ビジュアルや体感などで圧倒的な

感動を与えるものが、やっぱり受けているのかなと思っています。

あとは、過去というのはそれぞれ文化によって違いますが、未来というのは人類共通なので、基本的には、未来のヒントになりそうだったり未来に向けて人類の価値観を変えるようなものというのは、世界中の人が共通して探しているんじゃないかな、そういうふうには思っています。

あとは、これはお台場で今年の5月まで展覧会をやっていて、資料6から8ページの「チームラボアイランド -学ぶ！未来の遊園地-」というプロジェクトをやっていて、いろんなアトラクションをつくっています。それはどういうアトラクションかというと、例えば、これは「お絵かきタウン」といって、みんなが自由に、クレヨンで紙に絵を描くと、描いた絵が立体になって、街ができてます。これは「お絵かきタウンペーパークラフト」といって、自分が「お絵かきタウン」で描いた絵からペーパークラフトが出来ます。紙にクレヨンで描いたクルマやビルの絵が、展開図となってできて、展開図を組み立てると、自分の絵が立体になった世界で一つだけのペーパークラフトができ上がります。そういうような遊園地をやっていて、日本科学未来館で開催された「チームラボ 踊る！アート展と、学ぶ！未来の遊園地」では、約47万人ぐらい来場してくださりました。

そういう遊園地やっていますが、具体的に僕らの遊園地って今までの遊園地と何が違うのかというのが、結構、都市を考えるに当たってわかりやすいですね。遊園地というのは産業革命、産業社会の中でできたので、いわゆる産業社会というと蒸気機関の発明ですね。物理的に車みたいな、車とか自動車ですよね。そういう物理的に動く。つまり、今の遊園地も基本的には物理的に動くものばかりですね。産業社会にできたものなので。でも、我々はもう時代が変わって、今、デジタルが発明されて、デジタルって何かというと、物理的に動くことではなくて脳の拡張という発明ですね。なので、今、若い人たちが夢中になっているものって、基本的に脳が拡張されるようなこと、物理的に動くことではない。今までの遊園地は乗り物だったのに比べて、僕らはアートをアトラクションとしていると。もちろん、物理的に動くので、巨大で地上で郊外というのが今までの遊園地だったんですけども、僕らの遊園地というのはコンパクトで、別にフロアをまたいで、ビルのような中でもよくて、都心でいいと。今までは物理的なものだったので固定的でしたが、デジタルなので変化し続けると。今までの遊園地というのは、乗り物に乗るっていう、受動的、受け身型ですね。でも、僕らの遊園地というのは、例えば、自分で絵を描いて、その自分で絵を描いたもので、さらに自ら一緒になって遊ぶ。能動的ですね。今までというのは、ジ

キャスト・ファンですね。ただ乗って、何か楽しい。そうではなくて、もっと知育だったり、創造性だとか、感性が育つだとか、脳が開くという。今までというのは個人ですね。他者とはあんまり関係ないんですね。これからの僕らの遊園地というのは、すごく協働的だと。20世紀にできたもので、映画とか映画館とかつくる世界ですね。そうではなくて、アートとアーティストがつくる世界で、キャラクターではなくて、自分でつくったもの、自己表現ですね。つまりマスプロダクションされたものを消費したいとか所有したいという概念から、自分が手を加えたものを人にあげたいとか、ソーシャルで表現したいみたいな、つまり同じ遊園地でも全く違う概念でできていると思っています。

都市も同じように、2040年に向けて、全く違う概念でできていくんだろうと思います。別に東京がそうなるようになるまいが、世界のどこかの都市はそうなっていくと思っています。それはデジタルネットワークが前提の新しい社会で、その前提の新しい都市というのが、今後、2040年に向けてできていくんじゃないかと思っています。

具体的に、これは抽象的なんで、僕らはアートをつくっているんで、もうちょっとアート寄りの話をするので、例えば、これは「呼応する木々」という作品です。運河沿いの木々をライトアップしていて、人が近づくと光の色が変わって、色特有の音色を響かせる。そして、その木は、変化した新しい色を、両隣の木と対岸の木に伝播させる。近隣の木の色を変えながら、音を奏でていくんですね。運河全体が光と音によって1個の巨大なアート空間になります。そのアート空間になることによって、ふだんは運河の向こうのほうに人がいようがないが、あんまり気にならなかったと思うんですね。例えば、公園歩いていて、向こうに人がいるかいないか気にならないけど、向こうから、例えば、光が来たら、何となく向こうに人がいるんだって、他者を意識しますよね。こういうようなものをつくっているんですけれども。

これを『Digitized City Art Project』と名づけていて、具体的に何かというと、都市そのものをアートに変えていけるのではないかと思っています。今までアートというと、彫刻みたいなものが、都市の中にある、それが都市とアートの関係だったと思うのですが、そうではなくて、都市の一部だったり自然の一部を、光や音みたいな非物質的な素材で、その場が持つ物理的な要素を全く変化させず、つまり生かして、知覚するセンシングやネットワークを持たせることで、本来の機能を持ったまま、今あるものを生かして、その場を1つの作品にすることが可能だと思っています。例えば、街灯というのは、照度を担保すれば、別に状況に合わせて変化させてもよかったりするわけですね。なので、都

市の機能を持ったまま、都市のある部分を、そのままアートにしていくことができるのではないかと思っていて、もっと言うと、都市そのものが、都市の今までの機能を持ったまま、デジタルによって大きなアート空間になり得るんじゃないかなと考えています。さらに別に、ただ楽しいだけではなくて、さっきも言ったように、アートになることによって、そこにいる人々の関係性まで影響される、ほかの人を意識する、今まで以上に同じ空間にいる人々が互いのことを意識する、そういうようなものになっていくのではないかなと思っています。

実際、資料14ページの、これは「小舟と共に踊る鯉によって描かれる水面のドローイング- Mifuneyama Rakuen Pond」という作品で、佐賀の武雄の古い文化財の池なんですけれども、池をタッチスクリーンのようにして、船をセンシングして、船とインタラクティブに反応するような、池の水面を巨大なアート空間にしたりします。そういう都市そのものをデジタル化することによって、1個の巨大なアートにしていくというのは、そのままオリンピックにも同じように考えられると思っていて、例えば、さっきも言われたように、今までのオリンピックって鑑賞型ですね。20世紀に発達したので鑑賞モデルですよ。鑑賞モデルではなくて、参加体験型に変えられると思っていて、例えば、聖火リレー一つとっても、ただ聖火ランナーがリレーしていくのを見るのではなくて、例えば、こういうおもちゃの聖火をつくって、みんなが持って、その聖火は近くに光が来ると互いに呼応していく、そういう聖火をつくると、街頭の人がみんな聖火を持っていて、そうするとランナーが近くを通ると光がついて、自分の聖火に光がつくと、また後ろの人にも光がついて、後ろの人もまた自分がつくと、さらに後ろの人がついて、全員が聖火ランナーになれるわけですね。デジタルランナーですね。ついた後は制御することによって、みんなが持った聖火そのものが巨大なディスプレイになることもできるわけですね。そうすると、都市そのものが巨大なディスプレイになるわけですよ。これは東京の都市ですね。

競技を見るというのも、今までは競技場で見るとか、テレビで見るとかでしたが、ほんとうは実際体感すると。例えば、ここで100メートル走が行われると、60億人中、一番速い人たちが走っているわけじゃないですか。誰が勝ったか負けたとか超越して、ほんとうはめちゃくちゃおもしろいと思うんですよ。目の前で見るなら。でも、競技場だったら豆粒なんで、勝った負けたしか感じられないし、テレビだとリアリティがないので、勝った負けた、そういうメダル取った取ってないばかりにフォーカスが当たっていて、でもほんとうは最強の人たちが走っているわけで、単純におもしろいと思うんですよ。競技場で

見る、テレビで見る以外に、リアルタイムで先ほど、今回、冒頭で話したホログラムをお見せしたですけども、ホログラムみたいなものでリアルタイムに中継をすると。例えば、棒高跳びというと、棒高跳びをリアルタイムに街で中継すると、例えば、渋谷のど真ん中で棒高跳び中継して、「こいつら飛び過ぎて、スタバも入れないんだ」みたいな感じになって、全然おもしろいと思うんですね。そういうテレビと競技場だけではなくて、体感型の中継を街の中でやっていく。

もちろん、ホログラムというのは欠点があって、競技に合わせてメディアをつくらないといけないんですね。でも、逆にそれを利点だと思って、例えば、中継が終わったら、そのままこれを残して、別に再生し続けられるわけですね。幾らでも好きなように。例えば100メートル走であれば、一緒に走ることができるわけですね。一緒に走ったものを勝手に撮影してもらって、まるでオリンピックの決勝戦と同じムービーなのに、なぜか自分が一緒に走ってるみたいな。しかも、自分はまだ30メートルぐらいで中継、何か撮影が終わるみたいな感じになると、「あ、やっぱりこいつら只者じゃないんだ」みたいな、そういう。つまり、別に東京に観光に来て、記念写真を撮って帰るのではなくて、東京に来て記念オリンピックをやって帰るといって、で、それを持って帰るといって、ほんとうに参加・体験型に変えることができると思うんですね。しかも、街を使ってですね。

ほかにも、オープニングセレモニーみたいなものも、今までは競技場の真ん中でやってましたよね。それで、これはいわゆる舞台型ですね。舞台と一緒に、競技場の真ん中にシーン1があって、シーン1の舞台美術があって、シーン1が終わればシーン2に舞台美術が変わって、演者さんもかわって、シーン2が始まって、カメラもずっとシーン1からシーン2、シーン3と撮って行って、それでオープニングセレモニーの何らかの演出なり物語を見るという舞台ですね。でも実際は、別に多くの方はメディアを通して見ているわけなので、シーンが東京の街全体にばらけてもいいわけですね。なぜなら、どうせメディアを見ているので、同じ場所で行われているか行われていないかなんて、あまり区別つかないですね。カメラが切り変わっていただけなので。なので、東京のいろんな場所でシーンが行われて、シーン1が終わって、シーン2が違う場所で行われた瞬間にカメラが切り変わればいいだけなので、そうすると、例えば、街そのものがオープニングセレモニーの場所になりますよね。それにはさらに利点があって、オープニングセレモニーが終わった後は、その場所がそのまま、ある種のアートのインスタレーションというか、ある種の巨大な参加型のアトラクションになります。オープニングセレモニーのシーンがすべてメディ

ア、1個のアートであれば、終わった後に来て、同じようなアート空間を体感できて、もし全シーンを体感したならば、同じように、それも自動で撮影されていて、全シーン埋まると、その映像がもらえると、まるでテレビで見たオープニングセレモニーと全く同じなんだけど、なぜか常に自分がいるみたいな、そういうオープニングに変えられる、という。つまり都市をデジタル化することによって、そんなに具体的に何か、ビルを壊したり、場所をつくって、建物建ててというようなことをせずとも、巨大なそれぞれの場所を、1個の巨大なアート空間でき、それがセレモニーの場所にもなり、さらに、それがそのままアートのインスタレーションになり、アトラクションになると、そういうふうを考えています。これは2020年の話なんですけれども、2040年に向けて、基本的に全く新しい概念で都市というのを再構築していったらいいのではないかな、そういうふうに思っています。

すみませんでした。終わります。

**【前田副知事】** どうもありがとうございました。

では、続きまして梅澤高明様より、ご説明をお願いいたします。どうぞよろしく願いいたします。

**【梅澤様】** ご紹介いただきました梅澤です。よろしくお願いいたします。

私自身は本職、経営コンサルタントですが、今日はNeXTOKYOという8名のチームで昨年より議論をしてきた構想について、その概要をお話ししたいと思います。

チームNeXTOKYOは、建築・都市計画の森さんと藤村さん、スポーツの為末さん、社会学の古市さん、ビジネスの楠本さんと森さん、アートのスプツニ子！と私というメンバーです。今日はスプツニ子！もこちらで陪席をしております。

このチームで議論をしてきたのは、1つは当然、2020に向けてどうするかという話ですが、2020の先こそが重要です。2020の先を見据えて、東京と日本の魅力と成長力を高めるために2020をどう使うかという発想で、このビジョンを組み立てております。

さらに、この8名の外側で、私どもの議論にお付き合いいただいている方も何人かいらして、例えば、メディアラボの伊藤穰一さんとは、日本の産業界の巻き込みについて議論をしてきました。Twitterの近藤ジェームスさんとは、SNSを活用した都市づくりについて、あるいはネットイヤーグループの石黒さんとは、IoT、モノのインターネットを都市にどう装備をしていくか、タイムアウトの伏谷さんとは、インバウンド観光の視点から

の魅力的な都市づくり、そして齋藤弁護士とはダンス規制の改革についてと、それぞれのテーマの専門家の方々にもいろんなお知恵をいただいて、ここにたどり着いています。

基本思想として3つ、最初にご紹介をします。

1つ目が、知事もおっしゃってらっしゃいます、世界一の都市づくりに向けた東京。そのために必要なのは、都市としての魅力度の向上と、それから産業の育成です。2点目、高齢化時代の健康増進、あるいは多様性の包摂等、東京の持っている課題を解決していくプランであること。そして3点目、グランドデザインで大きなプロジェクトばかりやるのではなくて、いかにそれぞれの街が持っている、あるいは東京の住民が持っているクリエイティビティをボトムアップで生かしていくことができるか。その結果として、既存の資産、例えば、既存の建物や公園をどう生かして、魅力的なものをつくっていくか、というポイントに注力をしていくべきだと考えています。

NeXTOKYOのビジョンとして3つの柱を立てました。1つ目がFitness City。今日の話でいうと、山崎さん、あるいは前田さんがおっしゃられていたところと問題意識が重なると思います。

2つ目が、椎名さん、あるいは猪子さんがお話をされていたCreative City。そして3つ目が、今、デジタルシティという話もありましたけれども、Informationの力を使って都市をどう再構成していくか。猪子さんの話は、デジタルを使うことで都市をアート空間にするというお話が中心でしたが、それだけではなくて、デジタルの力を使うことで、都市の周回性や利便性を高めることで、この大きくて複雑な街を、迷い込んで楽しい1つのラビリンスに変えることができる、こんなふうに考えています。この3つの柱について、それぞれコンセプトと代表的な事例をご覧いただきたいと思います。

まず第1の柱がFitness Cityです。これは知事が冒頭におっしゃられていた、課題を楽しく解決したいということ、我々も議論をしてまいりました。高齢化時代におけるウェルネスという課題を楽しく解決するためには、どういう街になるべきか。あるいはグローバルシティとしての必要条件を充足するという意味でも、ウェルネスというのは外せないテーマです。この文脈で2つの開発テーマを設定しています。1つ目が、東京湾をどう使っていくかという話です。東京湾というのは、船から見ると実は裏面になってしまっています。海上から見たときに、この都市が美しく見えるという形に何とかできないかと。そのために、ここで掲げた提案の1つ目が、湾岸沿いにランと自転車のコースをつくれないうこと。2つ目が、既存の埠頭やヨットハーバーを、少しだけ手を入れてきれいに

した上で、広く民間開放をすること。そして3つ目に、海上、河川上の動線を、さらに充実させること。昨日、羽田から日本橋への水上ルートを引くというニュースがございました。大変素晴らしいことだと思います。この動線のように、羽田から重要なデスティネーションまでの動線を、一般顧客向けの水上バスと、それからエクスクルーシブな貸し切りリムジンのようなものをそれぞれ設けていくことで、東京の魅力度がかなり増すのではないかと考えています。

加えて湾内、かなり広い湾でございますので、洋上エンターテインメントの場所としても使えないだろうかということで、ここでは洋上のメガフロートの施設を設置することも提案しています。例えば、このような施設を湾内に置いて、そこでライブをやる、あるいは遊園地をやる、あるいは海中に浮かぶ水上プールをつくと、さまざまなプランができると思います。

ちなみに、この絵はオランダのベラドン社というところからプリ提案ということでいただいた絵ですが、軽量素材で、浮揚式で、環境負荷も小さくて、かつ移動も可能という仕組みだそうでございます。いろんなニーズに合わせて、こういうものを組みかえながら、東京の湾内もエンタメ性を高めていくことができると思います。

Fitness Cityのもう一つの軸は、この緑の動線を、徒歩・ランニング、あるいは自転車向けの動線に変えていくということです。グリーンネットワークと呼んでいます。東京の西側に伸びる動線は、皇居から神宮外苑を経由をして、明治神宮、代々木公園までと、東京で一番豊かな緑があるところを上手につないでいく。ここをランコースにするというだけで、ランニングが大好きな人たちを世界から集められるような魅力的な動線をつくることができると思います。北に伸びる動線は、東東京の安価な旅館泊まる外国人観光客も多いので、その人たちが浅草、秋葉原、銀座に向けて、ストレスなく徒歩、あるいは自転車でも来られるような動線をつくりたいという意図です。

この西側の動線に関しては、例えば、こんなイメージのものにできないでしょうか。首都高の地中化プロジェクトが進んでいると理解をしています。例えば、4号線の一部を取り壊すかわりに、こうやって残して、徒歩とサイクリングの場所に残せないでしょうかと考えています。ちなみに、マイケル・ブルームバーグ市長がニューヨークでつくった「ハイライン」ではハドソンリバー沿いの廃線となった高架の輸送線を、空中緑園にしましたよね。東京で類似の発想で公園をつくるとしたら、この4号線が一番の候補ではないのかなと考えております。

第2の柱がCreative Cityです。ここで提案しているのは、既にある資産を生かして、それぞれの街のエッジをさらに磨き上げて、魅力的な観光デスティネーション、かつクリエイティブ産業の集積をつくっていけないかというアイデアです。それぞれの街が異なるエッジ、異なる特徴を持っているというのがポイントです。

例えば、先ほど街をデザインするという工藤さんのお話がありましたが、観光客が夢見る浅草はこんなイメージではないでしょうか。一つ一つの街を外からの目線で、少しアニメチックで構わないので、イメージを膨らませていく。そんな形で街の魅力を増していくということができたらなと思います。

ボトムアップの具体的な提案ということでいくつかご紹介します。1つは、渋谷円山町のラブホテル街、これは営業ライセンスの関係で一つ一つ閉まっていく運命にあると思います。すべて壊して再開発をする代わりに、地元の若手クリエイターを集めて、それぞれの部屋とロビーをリノベーションしていくというアイデアです。地元のクリエイターをどんどん起用することで、リノベしたホテルのロビーが彼らの日常的なたまり場になっていく。その彼らが呼び水になって、新たなコミュニティのハブができる。実は、こんな形で大成功しているのが、シアトル発、アメリカから世界に展開をしているAce Hotelです。こちらの写真は、ニューヨークのAce Hotelのもので、一つ一つローコストのコンバージョンホテルですが、地元のコミュニティハブとして賑わっているものが多いです。

築地の市場跡地に関しては、食とエンタメの聖地に再開発することを提案しています。築地市場の海側のほうにある、アーチ型のきれいな建物をコンバージョンして、そこにフードコート、あるいはイーターリーをつくる、それからエンターテインメントの施設をつくる。そして、羽田から東京湾経由で、築地の埠頭に直づけをする海上のルートをつくると、羽田から直行で遊びに行ける、築地の歴史を活かしたユニークで発信力のある聖地をつくることができると思います。

もう少し未来的な話をすれば、例えば、台場にFormula Eを招致できないでしょうか。Formula Eは電気自動車のF1レースです。昨年スタートをして、世界10カ国を回っています。電気自動車世界の日本が、どうして、どうしてこのレースの開催地になっていないのでしょうか。東京で実施するとすれば、台場は1つの候補になろうかと思います。

Formula Eはすべて市街地レースなので、街の風景がテレビやSNSでどんどん世界に発信されます。ちょうど今、実物大ガンダムを歩かせようというプロジェクトがあります。例えば、このFormula Eのコースの中で、デッドヒートを演じているコーナーで実物大ガン

ダムが歩いていたら、どれだけのPR効果が期待できるでしょうか。このような組み合わせの効果で、既に動いているさまざまなプロジェクトの価値が何倍にもなっていくと思います。

Creative Cityとしての持続的な競争力を確保するために、クリエイティブ分野の研究機関や高等教育機関を充実したいと考えております。鍵はグローバルから最先端のタレントを集めるハブをつくるということです。デザイン、食、ファッションなどの分野で、世界に誇るクリエイターがたくさんいる東京で、そして世界に誇るコンテンツがたくさん生み出されている東京で学びたいというクリエイティブ産業のプロは世界各地にいます。しかし、英語で教育・研究ができる世界一流の学校や研究所がないのが実態です。彼らが世界から集まって、才能を世界に発信していけるような場所に東京がなろうではありませんか。

3つ目の柱がInformation Cityです。冒頭に申し上げたように、まず必要条件として強化したいのは、東京の街のナビゲーションです。成田や羽田、あるいは東京駅に着いた外国人の観光客に、スマホにタダで1つのアプリをプッシュ配信します。そのアプリは翻訳機能と、乗り換え検索機能やレストラン検索機能、そしてそれぞれの街の防災情報などが入っていて、全ての主要言語に対応し、ウェアラブルにも対応したアプリです。これをタダでばらまくだけでも、東京の利便性は相当高まると思います。

産業育成の観点で実現したいのは、これから数年間の東京を、I o Tの巨大な実験場にすることです。例えば、パーソナルヘルス、スポーツ・エンターテインメント、モビリティの進化、セキュリティのインテリジェント化、そしてマーケティングの進化など、実にさまざまなテーマがあります。私どものクライアントである日本の大企業も、各方面で少しずつ実験や事業化を進めています。それらを、これから数年間で一気に加速し、かつ1社、1社でやると小さな話になりがちなものを束ねて実験することで、「東京に行けばI o Tの最先端が見られる」という状態を実現できれば、2020はインバウンドのピークになるだけではなくて、日本の産業の非連続な成長の突破口とすることができると考えています。

最後に、ここまで申し上げてきたことを別の切り口で申し上げると、「テクノロジーとクリエイティブで稼ぐ世界の都市・東京をつくりたい」という思いです。ビジネスとテクノロジーとクリエイティブを繋げる、というテーマです。ちなみに、我が日本には、山海さんがトライされているような世界最先端のテクノロジーがあります。そして、椎名さんや猪子さんのように、世界に誇るクリエイティブな才能もあります。でも、大変残念なのは、このテクノロジーとクリエイティブとビジネスが一体となって戦えていないというこ

とです。私はビジネスフィールドの人間なので、それを常日ごろ感じています。この3つをもっと融合して日本の産業競争力につなげていくことができれば、東京が魅力的な街になり、その課題を解決していくことだけでなく、日本の産業も世界最強になると固く信じています。これを実現するために、世界の資本と人材を集める。そしてビジネス、まちづくり、行政を、工藤さんが言われたようにデザイン視点で再構成し、その作業をリードできる人材を育成していくことが重要だと考えております。

ありがとうございました。

【前田副知事】 どうもありがとうございました。

では、続きまして、首藤若菜様よりご説明をお願いいたします。どうぞよろしく願いいたします。

【首藤様】 初めまして。立教大学の首藤と申します。よろしく願いいたします。

私は立教大学経済学部というところにおりまして、労働問題や社会政策を中心に研究しております。皆様の報告を聞いて非常に楽しませていただきましたが、私の報告は非常に地味です。申しわけございません。音声もデザインも何もない、非常に学生に悪いことをしていたなど今つくづく反省しておりますし、できればそちらの都庁のスタッフの方に混じって座りたいと思うぐらいでして、非常に地味な世界で生きておりますので、申し訳ございませんが、少々おつき合いいただければというふうに思います。

東京の長期ビジョン等を読ませていただきまして、輝かしい、世界一の都市・東京になるんだというのは非常に私も共感いたしました。そこで非常に大きな課題になってくるのが人口減少と少子高齢化であるということは明らかだと思います。東京は特に出生率が非常に低いです。全国の中でも非常に突出して低くて、これを見ていただくと、全国が1.38になっていますが、東京は1.13です。2040年になるとさらに下がるというような予測が出ています。しかも、東京というのは他の地方から人が入ってきます。特に若者が入ってきます。ですので、人口自体はそんなに大きく減らないんですけども、他の地方は若者がいなくなりますのでもっと少子化が進むわけですね。その中で、東京で若い人たちが子供を生まないということは、実は日本全体の人口を急速に下げていくことになります。ですので、東京で出生率を高められるかどうかというのは、日本の今後を左右する非常に重要な問題だというふうに考えていますし、そういう強い危機感を持つべきだろうというふうに思っています。

子供が生まれなければ、当然いろんな問題が起きます。長期ビジョンの中にも書かれて

いましたけれども、労働力は足りるんだろうかとか、高齢化が一気に進んでいきます。さらに言えば、こういう高齢社会や単身世帯の増加というのが東京の特徴でもありますけれども、それと貧困問題というのが非常に密接にかかわってきます。

例えば生活保護の受給者の比率、保護率というふうに言いますけれども、結構、東京は高いんです。東京というと非常に豊かで、華やかで、多くの若者を魅了していく都市というような印象があるんですけども、その中で実はじわじわと貧困層が増えている。しかも、あまり特定の都市を言うとなれですけども、例えば貧困問題というと、かつては大阪府なんかはその典型的な問題を抱えているというふうに考えられてきたんですけど、今、東京のほうが高くなっています。さらに今後、上昇していくというふうに考えられています。

ただ、こういった問題というのは、今後非常に深刻化していくと思いますけれども、私は解決することができるというふうに思っています。その解決策の1つとして、いろんな方法がもちろんありますけれども、今日ご提示したいのが、女性と子供というところをテーマに、この2つは同じ政策でもありますので、1つの政策をご提案したいというふうに思っています。

どうやったら解決できるかという、女性の就労を促進することなんです。女性が経済的に自立して働くことができる社会というのは、社会的に非常に大きな効果を持ちます。まず、当然のこととして、働く女性が増えれば労働力が増えますので、労働力人口がそんなに大きく減りません。例えば男性並みに女性が働くと、2030年までは労働力人口はほとんど減らないというふうになっています。かつて、女性が働くと出生率が上がります。一般的には、女性が働くようになったから子供を生まなくなったんじゃないかというような説を言う人がいますが、これは明らかな間違った認識で、国際的に見ても、研究的な観点からいいますと、女性が働くことというのは出生率に非常に強い正の効果を持っています。ですので、正確に言うと、女性が働くというよりは女性の働く環境を整えることが出生率を上げるということになるんですけども、先ほど東京も出生率がすごく低いですよというふうに言いましたが、子供を生まない東京では、女性たちはさぞ働いているんじゃないかというふうに思われるんですけども、この図を見てみますと、ちょっと見にくいんですけども、こちらが東京都です。若いときは、東京都というのは全国よりもよく女性は働いているんですね。でも、いわゆる子供を生む世代になって、30代、40代、50代になりますと全国よりも就業率というのは下がっているわけです。つまり、働くか

ら子供を生まないというよりは、仕事と家庭の両立が難しいから子供を生めないような状況にあるということは明らかになっているような事実です。さらに女性が働けば、貧困の縮小にも解決します。働くということは、その時々収入を得るだけでなく、社会保険料をおさめて年金に加入するというような行為につながりますので、これはそのときの貧困問題だけではなく、高齢期の年金をきちんと受給するという意味で、非常に長期的にインパクトがあるというふうに考えることができます。

でも、働くといっても、どんな仕事でもいいから働けばいいのかというと、それは決してそんなことはなくて、当然、雇用の質の問題があります。安定した雇用や、生活できる賃金、専門的にはDecent Workというような言い方をしますが、そういったものの保証は当然必要になってくるんですが、これは私、専門なんですけれども、ただ、働き方とか労働規制とか雇用慣行の問題というのは、どうしても1都道府県でできるようなことはかなり限られていますので、今日はその部分は省略したいと思うんですけれども、ただ、1点申し上げたいのは、これから東京はグローバル都市を目指す。これは本当にそのとおりだと思います。ただ、グローバル化をしていくということは、雇用との関係でいうと、グローバル化というのは結構雇用を不安定にする要素、側面もあるんですね。雇用が不安定になっていくと、当然、それに対して反発や抵抗も起こってくるわけです。そのグローバル化を強く進めていくときに非常に重要なのは、同時に強い福祉的な支援みたいなものを行っていく。そうすると、人間はみんなそうですけれども、自分の身が安全だと思うと急速な変化を受け入れる余地が当然広がっていくわけです。ですので、グローバルシティを目指すんだと、海外の企業をどんと誘致するんだと、そうなれば当然、東京は、例えば労働規制を緩和する特区を設けようとか、いろんな話が出てくると思いますけれども、それを進める一方で、強い福祉的な支援みたいなものを検討してほしいというふうに強く思います。

さらに、グローバル都市になるということは、ある程度国際的な水準や国際的なグローバルスタンダードというものを東京は意識することになると思います。そのときに、例えばジェンダーの問題からいうと、日本は非常に国際的な水準から遅れているんです。皆さん、ご存じだと思いますけれども。それを国際的な水準に、東京が引っ張って持っていくんだというような考え方はできないかなというふうに思いました。

ここに一例でクォータ制というのを書いておきましたけれども、クォータ制というのは、政治や雇用や教育の場で一定の比率を女性とかマイノリティに割り当てる制度になります。

最近の調査では、大体80カ国以上の国々が導入しています。日本ではほとんど議論されませんが、東京は都議会の女性比率も非常に高いですので、こういったものを東京が率先して導入していくということは、全国にも非常に波及効果があるんじゃないかというふうに思いました。

今日の話のメインになりますけれども、女性たちがどうやったら働くのかということなんですけれども、これからの時代、女性も働くだろうというような楽観視は決してできないというふうに私は思っています。今後25年が2040年になりますけれども、25年後はわかりませんが、25年前の女性の就業率と今日の実業率を比べると、むしろ下がっているんですね。何もしないで放っておいても女性はみんな働き出すということは、ないというふうに思ったほうがいいと思っています。当然働き方を見直すというようなことも必要なんですけれども、東京都でできることとして、期待したいこととして、ビジョンの中でも待機児童の解消をうたっていますが、もう一歩踏み込んだ政策が必要だろうというふうに思っています。

そこで今回の提案は、1、2歳児に良質で普遍的な保育サービス、さらに3歳児からの義務教育というようなところを提案したいというふうに思います。1、2歳児に普遍的な保育サービスをというのは待機児童の解消ではなくて、普遍的に与えるということは、誰もが子供を預けられるようにするということなので、待機していない児童にも良質な保育サービスをどんどん提供していこうというようなことになります。さらに3歳になれば、義務教育として皆等しく保育及び教育サービスを終日受けていくというような体制をついたらどうか。これは女性の就労を確実に促しますし、それだけじゃなくて子供の貧困というのが問題になっていますが、子供の格差解消に非常に効果を発するというふうに考えられます。

実は、最近の発達心理学の研究なんかでは、認知とか行動様式というのは3歳未満でほとんど決まってくるというふうに言われています。これは生きていく上で非常に重要な能力が、実は就学前にかなり固まっているということがわかっています。ですので、子供の平等を図るために、これまでは小学校以降の教育をどうやって平等化していくかということが議論され、高校の無償化が議論されてきましたけれども、実はそれと同時に、幼児教育の無償化ですとか、幼児教育の義務化というものも議論するべきじゃないかというふうに考えています。こういう話をすると、でも、お金がないよという話に当然なります。でも、欧米の研究者と議論すると、これをやったほうが財政的に効率的なんですよというこ

とをよく言われます。というのは、こういう幼児期の就学前の子供に良質な保育サービスを与えるということによって、その後、犯罪率ですとか生活保護の受給率とか、そういったものが大きく変わってくるというようなことも研究としては指摘されています。ですので、長期的に考えると、こういう政策を打ったほうが非常に財政的にも効率的かもしれないということです。

さらに言えば、2040年になれば移民労働者が今よりも増加しているというふうに予想されます。移民労働者が増加した国々を見ますと、その貧困問題や社会的な統合が当然議論になってきます。幼児期から良質な保育サービスを普遍的に提供するというをやれば、言語の面や行動様式の面において、移民労働者の社会的な統合というのは、より容易になるというようなところもメリットとしてあるのではないかというふうに思います。

では、時間になりましたので、ここまで終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

**【前田副知事】** どうもありがとうございました。

では、続きまして山海嘉之様より説明をお願いします。

**【山海様】** 山海でございます。早速始めたいと思います。

お手元の資料に入っていないものも一部入っておりますが、今日のお話を受けまして、いろんなすばらしいお考えがどんどんと提示されておりますが、私のところでは、今、科学技術ということをして1つの軸にしてどういう展開ができるかということをお話できればと思います。

2040年というのはかなり先ではありますが、実は科学技術の進歩は、これから直線的にその進化が予測できるというレベルを超えて、さらに加速してくることは、この時代では十分あり得るんですが、現在の技術をちゃんと社会実装していくということだけを見ても、少なくとも10年ぐらいかかってしまいますので、そういう意味では、これからお話しする話は、ちょうど2040年のちょっと手前ぐらいにはかなり現実味を帯びたものとして、普通に使われるんじゃないかというふうに考えております。

私がここで強調したいのは、こういうテクノロジーを使いながら、先ほどから高齢化という話が1つありますけれども、その中で非常に厳しい重介護という分野ですね、つまり重く厳しい介護の分野の内容をゼロにできるんじゃないかという、介護する側もされる側も、その2つの両面に対してテクノロジーを介入させることによって健康度が高まり、そして支援する方々が楽になっていくということで、社会参画も含めて、あらゆる面でいろ

んなものを解決するんじゃないかと考えています。

そこで、ピアサポートという仲間支援という概念に対して、そこにテクノロジーを介在させることによって社会全体が1つの塊になっていく。人類はほかの生き物と違いまして、テクノロジーを手にしてしまっているんですね。つまり生き物としての進化の道を捨てて、テクノロジーとの進化の道をもう歩んでいるわけですから、ここをうまく活用して社会をつくるというのは1つ重要なことじゃないかと思っています。ここでCCRCと書いてありますが、このRはリタイアメントというよりはリノベーションという、元気回復という意味で使っております。

今は、介護する側、される側という人たち、あるいは治療する側、される人たちが、人と人との間でかなり大変な状況になっておりますが、そこに1つ、人間の生理系の機能の改善と、それからロボットなどのような技術、そして社会インフラにまでテクノロジーを入れることによって社会全体を高度化することで厳しいところを乗り越えていく、そしてまた、楽しいところに時間を増やしていくということを考えてみたいと思います。そのために、先ほど申し上げました人間の本来持っている機能を改善させていくことと、そして支援していくという、そういう話になります。

1つの出口イメージはこうなっています。これを書くと、ただのイメージではないかというふうによく言われることもあるんですが、私は実は、こういうイメージを頭に描くと、それを実現するためにまっしぐらで動いております。ですから、いくつかのものはもう既に社会の中に実装を始めておりまして、実際に製品というものの形でだんだん出して、社会の中で進化をさせている、そういう状況になります。

これをざっと見ますと、人間の身体の内側の情報から生活、お風呂場の話とか、今、実は家庭の中の事故で亡くなる方と交通事故で亡くなる方と比べると、家庭の中で亡くなる方のほうが多くなっているわけです。交通事故のほうが少ないわけです。冗談のような言い方をすれば、家にいると危険だから外へ出ようという話になりかねないわけですが、そうすると家庭の中をどこまで整えていくかというのは、かなり重要になってまいります。そういったことも含めてやります。こういう技術が横展開しますと、作業現場であるとか、工場の中も高齢になっても働ける、あるいは高齢になった技能者の技能をちゃんと伝授できるような、そんな仕組みもできると思っています。

今日お話する中で、例えばこんなこともありました。つまり人間の脳・神経系の情報とテクノロジーを使う技術ができ上がってきまして、これは私どもが開拓した技術ですが、

これによって人間の意思で人工物を動かしていくということにつながっていきます。実はこれをうまく活用すると、脳・神経系に障害とか病気がある方に対して、こういった技術を使いますと、脳・神経系と筋肉の間のシナプス形成がどんどん改善されまして、それまで体が非常に動きづらかった方が、どんどんと機能が改善することもだんだんわかってきてまして、今、ドイツでは公的労災保険が使われるような技術になっています。これは1つのテクノロジーではありますけれども、このテクノロジーが単に使う道具というよりは、人間自身に対しても大きなフィードバックを与えているというところが大きいということです。

原理だけ見てみます。人は体を動かそうとするとときに脳から信号が出てきますが、体を動かそうとするとロボットが言うことを聞いて動いてくれる。センサーをペタペタとシールで貼るだけです。そうすると、彼は健常者ですけれども、体を動かそうとすると、こうやって動いてくれるんですね。ちょっと不思議な技術です。これがだんだんお年を召してきたりして体が動かなくなってきたりしても、この信号さえ検出できると、体が動かなくてもちゃんとロボットが動かしてくれるわけです。これを装着さえしておけば、先ほどのような機能改善のループを回してくれるという、そういった原理がやっとヨーロッパ全域で医療機器になりまして、そして、こういったものを使って、ドイツでは公的労災保険が適用されるようになりまして、ことし中には通常の健康保険のほうに申請をするという話を聞いております。

この1台で1日に何人もの治療ができます。こうやっていきますと、これは治療風景ですが、最初、こんなに状況が悪い方が、脊髄損傷の方ですけれども、どんどん動けるようになりまして、これを外したときが重要なんですね。それまで介助者が必要で、自立度が非常に低い方が、これを繰り返していくことによって、とうとう治療プロトコルを終えますと、こうやって介助者なしで普通に動けたりすると、トイレに自分で行けるだけで、介助をする人たちがずっとついていかなくていいので常時滞在型から、巡回型に変わるだけで雇用費がぐっと減りますから、公的費用の支出がぐっと減るということで、社会費用が低減できる。つまりハイテクが入ることによって社会の支出が減ってくるという、そういったことのシナリオが重要だと思っています。

これは一例ではありますが、こんなことがどんどんと今できるような時代がやってきます。さらにテクノロジーの話では、例えば山中先生などがやっておられます再生医療などの世界とこういったロボットの組み合わせによって、一旦弱ってしまった身体機能がまた

これから改善していくような流れもできてくる可能性が高いです。そうすると、2040年の時代のところに向けて、そういうアプローチも1つあるかと思っています。

これはかなり激しいものですが、パラリンピックに関係するかもしれませんが、例えばこの方は、ここから先の脚がありません。大腿から脚が切れております。そこにこういった原理の技術を組み込んだ人工の脚を装着してもらうことでご自分の意思で脚を曲げ伸ばしし、そして歩く、こんなことも1つの技術展開になります。さらに両脚を切断なさっている方に適用した事例を見てみますと、両脚がない方も階段を上って歩いていく、こういう技術までできてくると、これから次の時代にどんな技術になっていくかということいろいろディスカッションしてくると、さらにいろいろ広がってくるかと思っています。

さらに、今は身体機能を高めていくという話をさせていただきましたが、介助する方々がこういうことをやってくると、どうしても腰を痛めてきます。応力解析をいたしますと、こうやって物を持つだけで骨がぐっと圧迫されて、椎間板ヘルニアになります。介護現場では7割、8割の方が腰痛持ちと言われているのですが、ここにつけるような腰バージョンをつけた瞬間に、ずっとこれが低減できることが解析でわかりました。わかった瞬間に何があるかということ、物をつくるということで、つくりました。センサーを貼って、腰にこれを身につけます。彼女がこれでカチャッとスイッチを入れて、こういうものを持ちますと、脳から筋肉へと体を動かしたいという信号が出て、その信号を受けてロボットが彼女の意思に従って動くという、不思議なものです。サイボーグ型のロボットです。とうとうサイボーグが社会に投入できる時代が来たということです。そうすると、これを見てもりましたら、例えば国内最大手の大林組さんなどでは、こういったものを工事現場で使っていこうという流れで、もう導入が始まりました。実は今、建設現場も、工場も、金融でお金を運ぶ方々も、実は今使い始めていただいているということで、だんだん高齢になっても仕事が続けられるということで、長く社会参画をするということが、こういったテクノロジーが実現させられるんじゃないかというふうに考えています。

形も格好いいです。デザインがとても重要なんです。使ってみたいという想いが重要で、あれ、すてきですねというふうに言ってもらえる技術にしていきたいなと思って、こういうデザインにしてあります。介護現場のものは清潔に白、そして作業現場ではこういうものですね。

少しつけ加えておきますが、こういったものをつくる時は、必ず日本が世界に輸出できるようにして、すぐそれが産業になるようにするためには国際規格というものをどんど

んととっていく。革新技術はもともと国際規格がないわけです。それを自分たちがISOのエキスパートメンバーになってでもそういったことをやりながら、こういうものを作ってきました。実はこういう分野はとうとうでき上がって、社会の中にテクノロジーが入っていくときに、規格を満たせば社会で使える時代がやってきたということになります。さらに、健康管理という点についても、これまでなかった、病院でしかはかれなかったこんな大きな装置を家庭の中でも、あるいは職場でも使えるというふうにすると、例えば今日こちらにいらっしゃる、職場でストレスフルに働いている方はお気をつけください。もし不整脈とかあったりすると、心臓から血栓がピュッと飛んで、詰まってしまったらもう大変です。そうならないようにするためには日常が必要で、家庭の中で見るというよりは職場ですっとはかられたらいいわけですから、こういったものもちゃんと職場で使えるようにしていくのが、予防とか早期発見には良いかと思っています。

今、コックピットのもつくってしまして、こういうものを使うと、畳1枚のスペースで、ゲーム感覚で、家にいればいるほどより健康になれると、そんなものができるんじゃないかと思うんですね。それが社会に対しての1つのテクノロジーのフィードバックではないかと思っています。

さらに、こういうものをつくりました。これはAIが搭載されていて、非常にお利口さんのロボットなんですけど、掃除もしてくれますし、物も運びます。ここに椅子を載せれば、ロボットのチェアとしてA点からB点まで安全に運んでくれるわけです。実はこれは道路の交通についても、ロボット自動車についても全部同じような技術ですが、ひと回り小さなロボットの技術の方が、そういう意味では楽なんです。道路を走らないで歩道を走ることができるわけです。そうすると、こういった技術がどんどん磨き上げられてきますから、ロボットが社会に入っていく時代がつかれるということになります。

今日の話で、本当にホットな話なんですけど、これは羽田空港です。ロボットがこうやって運んでいくような話が、試験がこれから始まろうとしています。そうなってくると、例えば車椅子に乗って荷物が持てない方でも、ロボットがずっとついて搬送してくれると、こんなことができると、人がそばにべったりついてなくてもいいような時代がくる、自立度が高まるというのは、そういうことだと実は思っています。これを例えばお買い物で使ってみる。買い物だって、大丈夫。買い物をするためには、横断歩道を渡らなきゃいけないです。しかし、横断歩道、あるいは歩道なんですけど、道路なんですとかと言われると、微妙なところに入ります。先日そういった話をしましたら、早速、警察庁の方が来てくだ

さって、今、検討に入ってくださいっていますが、もし横断歩道をちゃんと渡らせてくれるのであれば、これを社会導入する中で、買い物になかなか行けない高齢者の方をちゃんとこういったロボットが運んでくれるという、そんなことだって実現できるんじゃないかと思っています。

こういったものをつくり上げることの意味は、ロボットにやさしい街というのは、ランナーにも、高齢者にも、また災害時にも非常に効果的だということです。そのためには、電柱が邪魔をしているところは、きれいになくなるだけでも、その分、幅が広がるとロボットが走りやすくなります。そういったことをやっていただくだけで、ロボットが社会に入れる時代、一緒に動ける社会づくりができるようなことが、2020年には、例えば1つの小さなエリアで実験もできるでしょうし、それから2040年には、本当に社会の中で使われるものになってくるんじゃないかと思っています。

これを実現するために、今日は私、筑波からやってまいりましたが、東京の大田区の羽田とか川崎というところにエリアが1つありまして、東京圏の国家戦略特区の中で、今1.5ヘクタールの場所を確保しまして、ここにこういうものをちゃんと推進していけるように、世界からいろんなものが集められるような場をつくろうと思っています。これをこれから集めながら、世界からテクノロジーや人材もそこに集めて、これから日本の東京を中心として、そこに新しいモデルをつくってみたいなというふうに考えています。早速、この秋ぐらいから建設を始めようと思っていますが、こういう好循環のイノベーションのサイクルを実現するためのものです。2つ建物がありますけど、こちらの第2期工期のほうは、これが多目的ホールで、こういったことができるような、次の時代の楽しいものをつくり出していく場にもしてみたいと思っています。これがそばにあるということで、こういうイノベーションを進めていくところでよい化学反応が起こせるんじゃないかというふうに考えております。今、こういう世界からイノベーションのシーズが日本に集中する仕組みをつくりながら、これを東京圏の中で進めていきたいと考えております。

ということで、全体像を出させていただきましたが、もう一度申し上げますが、このRはリタイアメントではなくてリノベーション、元気回復というようなまちづくりになればいいと思っています。

以上です。どうもありがとうございました。

**【前田副知事】** どうもありがとうございました。

皆様から大変充実したお話をいただきまして、本当にありがとうございました。当初の

予定時間に達しておりますが、知事からも時間をいただきました。意見交換の時間をどうしてもとりたいと思いますので、20分を目途として意見交換に入りたいと存じます。ご発言の際はマイクのボタンを押していただいて、お願いしたいと思います。

まず最初に、舛添知事。

【舛添知事】 いえいえ、皆さんから。

【前田副知事】 それでは、非常に中身の濃い話ばかりでございましたが、それぞれご活発に意見交換をしていきたいと思います。私ども行政とのやりとりだけでなく、有識者の皆様の間でもご議論いただければ大変ありがたいと思います。ご発言を梅澤様、お願いします。

【梅澤様】 ありがとうございます。

山海さんに質問です。今おっしゃられた話を、東京を舞台にして、どんどん世界の技術、あるいは世界の資本を巻き込みつつ東京でイノベーションを起こし、さらにそれを世界に見せていくということは、2020までの間にどんどんやりたいじゃないですか。

【山海様】 はい、そのとおりです。

【梅澤様】 そう考えたときに、何が一番のハードルになるんですか。どこをクリアしたら、それが実現しますか。

【山海様】 先ほどのような拠点を1つつくなくても、あれは並行的に進めれば何とかなると思うんですが、例えばテクノロジーとしては、お買い物とか、そういったことで街に対していろんなことができるような技術がだんだん育ってきているんですけども、横断歩道1つ渡るだけでも、ずっとディスカッションを繰り返していかないといけないようなところが1つあったりして、これは街を扱う方々が、各省庁、縦割りになっていると思うんですが、そこをうまく取りまとめていただいたりすると、例えばここを1つのエリアにして、そこでそういったテクノロジーを育てていってはどうですかと。実はテクノロジーは、閉じた世界では育たないんです。実際に使っていただきながら、自動車がここまでするには120年以上の歴史があるわけです。そういったものを、日本が得意とするこういう技術をベースにどんどんいろいろなものを足していくと、それこそ、例えば今日、私、ここでぱっと見るだけで、頭の中がもうtoo muchなぐらいいろいろ、これ、やろう、あれ、やろうというのが出てくるぐらいで、そういったことが連携してできると加速できるんじゃないかと思っています。そういう意味で、行政的な取り組みと、それから、こういったネットワークを加速させていくということが重要だと思います。

それからもう一つは、進めていくときにどうしても資金が重要になりますが、これは今、世界に対して投資をいただきながら、そこを一気にやっております。本来は国がやってもいいのかなと思いつながら、まずは動かないと社会が動かないので、取り組みとしては、まずは動くというのが重要ではないかと思っています。

【梅澤様】 ありがとうございます。

【舛添知事】 いいですか。今の関連で、私も今、片一方の脚、サイボーグになっちゃっているんで非常によくわかるので、高齢化社会対応の1つの答えがそこにあると思うので、特区制度なんかも使えればいいんですけども、基本は規制緩和だと思うんですね。東京都の範囲内でやれることはやりますけど、例えば東京都道は私の権限でできるんです。港区道とか渋谷区道は区長さんの権限なんです。国道は国土交通大臣なんです。そうすると、こういう人たちと仲良くしておかないとできなくて、自転車の推奨ルートをつくったときに、最初、都道だけだったんですけど、今話して、国道も都道も区道もできたんで、こういうことをやりたいなど。だから、さっきのロボットの買い物ニーズなんて非常にあるし、介護も人がいなくできるので、行政のほうはそういうことをやるべきかなというのをちょっと感じました。

【山海様】 はい。

【舛添知事】 どうぞ、ご自由に。

【前田副知事】 よろしく申し上げます。

【前田様】 失礼します。

どの先生方ということではないのですが、1つ意見を申し上げさせていただきます。グランドデザインを描くということで、取り扱う検討すべき対象は本当に幅広くて、それをどう交通整理していくかというのは悩ましいところだと思うんですけども、生活者視点に立ちますと、これからの社会がどうなるのかというときに、いわゆるイデオロギーといえますか、精神性といえますか、日本は中福祉・中負担、正確には中福祉・低負担ですけども、アメリカ型ですとか北欧型がありますけれども、日本、その中でもトップの東京が、これからの東京をどういうイデオロギーをベースにまちづくりなり人のライフデザインを描いていくかということが、グランドデザインの根底にあるべきではないかと考えています。そういったところも今後の検討の中で策定されていったらとよいと、期待をしております。

【前田副知事】 ありがとうございます。

**【舛添知事】** すいません。今のは、前田さんの問題意識は山海さんともつながるんだけど、例えば、私も手術した後、介護が必要で、今、自分で歩けるようになったんで、それを見ているとわかるんだけど、例えばロボットをやりますね。これの費用は誰が出すんですか。それによって前田さんに対する答えが違ってくると思うんです。

**【山海様】** これは実は、各国のいろんな文化でも違うと思いますが、例えばドイツの場合には、彼らがいろいろ検証しながら総合的に評価をして、最終的に介助者の方々の費用が削減できるということで、ロボットそのものは無償で今置いていて、使っていただいたときに、1回治療を行うと、治療費が一旦払われます。その治療費に対して、ドイツの保険機構と契約をしたので、そうするとその保険のある割合が分配される形で、要は、必要なときに使ってもらった分だけがちゃんと治療費用として入っていく仕組みになっています。アメリカの場合には、今、世界最大級の民間保険会社の方々とお話をしながら、その役員の方ともお話をして、保険の設計というんでしょうか、官と民の公的な保険と民間保険とのコンビネーションによって、どういうふうにそこをうまく賄うかということは今設計している最中になります。

あとは、試みにサテライトを準備しまして、そこでは海外からの方々が一月とか二月滞在をして使うこともできるようにしてあるんですが、そのときには自費で払っていただくことになっておりまして、その自費でもちゃんとそこが必要な場合にはある程度カバーされ、払える方はやるんですけど、実際に皆さんそうだとはいえないので、トータルで、実は日本の医療の保険ですと、病院での保険は医療保険のところで行いますから、そこで最適解を出そうとする話と、職場、病院、残りの人生のことを含めたトータルで公的な費用がどこまで圧縮できるかという発想で保険を使うのかでは、実は答えが違って来るんですね。ドイツは、そこを全部見通した状態で設計してくれたのが大きかったと思います。

**【舛添知事】** どうぞ、皆さん、ご自由に。まだ発言なさっていない方。

**【山崎様】** 山海さんの提案はすごく大事なことで、医療や介護の現場に行くと、本当に困っている状態というのがあるので、すごく賛成なんです。

一方で、最初にお話ししたみたいに、テクノロジーであったりとか、技術がよくなればなるほど、それにずっと甘えていくということになってしまうのは、どうしてもしょうがない点があって、だから多分、両輪で進めていかなきゃいけないことなんだろうと思うんですね。とにかく買い物ロボットが買い物してくれているんだけど、孤立死していたみたいなことになったらしょうがないので、そこら辺、どういうふうに人と人がつながっ

て、テクノロジーで一步外へ出ていきたくなる、誰かと会いたくなるということもあるだろうと思うんだけど、一方では、これは便利だからこれに頼っちゃったというふうにならないような仕組みであったり、これは仕組みの問題ではないのかもしれないんですけど、出て行って楽しいねとって、一緒に何かやりたいというふうにするような機会を、もう事あるごとに東京都中につくっていくということが、一方では大事になってくるのかなということ、コミュニティデザインなんかをやっている立場からは感じました。

【工藤様】 都庁の皆さん方、オリンピックに向けていろんなことをそれぞれのセクションが考えてやっつけちゃって、おもてなしをしようと思って、例えば子供たちに英語教育とか、いろんなことがありますよね。最近、私が感じているのは、結局、一生懸命英語を覚えたりしても、ひと声掛けるための一步が出るかが問題。先ほど言った、いろんなテクノロジーと自分の意識の一步というものの鍛え方がどんどん小さくなってきている。先ほど椎名さんがおっしゃった、芸とか、文化とか、いろんなことは、教育の世界では、周辺教科と言われるんですね。高校だと、国語、数学、英語、理科、社会以外とって、家庭科、美術、音楽、体育というのをそれ以外とって、受験科目を集中的に勉強させようという方向が根づいてしまった。でも、数年前に、芸大の先生たちと『周辺教科の逆襲』という本を出しました。例えば体育によってチームプレーということを知っていくとか、音楽による感性の教育とか、日本の明治時代の教育は、授業の中で作法の時間など、圧倒的に、周辺教科の時間が占めていたようです。それがどんどん減ってしまって、ヒューマンな自分の感性を外に出していくチャンスをなくしている。オリンピックを通して、システムはつくったまでは良いけど、それを発揮するためには人間力というのかな、対話力とか。知らない言語の人たちに対して、ひとこと言えるかという、その一步目をどうやって押していくか。今、タイから1人若い学生が事務所に来ている、そうすると、さっき言っていたアプリは、タイ語も、英語もできるんだけど、タイ語でみんなしゃべりたいとって、アプリを使って言いたいことを一生懸命伝え合っています。それは当然のことから今なっていますから、両方、話し掛けようという心とテクノロジーを何とか重ねていかないと、みんなシラッとした感じになっていくので、それをどうやっていけばいいかという。それぞれの分野の方々、頑張っていかななくてはいけないと思うんですけども、問題というか、私の感想です。

【山海様】 実はそこはとても大切で、今日のお話の中のほとんどは、ロボットが勝手に何かをするというのではなくて、人がそこに必ず介在するような形のテクノロジーなん

です。先ほどの買い物1つとってみても、家にいる方が買い物に出て行って、例えば4時間後におうちに帰ってこなくても、ケアをしている時間を十分に使いながら、そうでない仕事をテクノロジーがやってくれるとか、人と人が一緒に何をする時間が増えてくるようなテクノロジーになるんじゃないかというふうに実は考えています。

あと、例えば1つの例としては、携帯電話は1つの例ですけれども、交通量は異常な状態まで増えてきていると思うんです。そこはむしろやりすぎじゃないかというところもあるんですけれども、今では携帯電話を握りしめて眠っている子までいるぐらいの、ここまでテクノロジーが人と人をつなぐツールにはなってきているのはたしかだと思います。特に難病の方々に、コンピュータも打てなくなった方に先ほどのようなテクノロジーを介在させますと、全く体が動かない状態の中で、コンピュータで文字を選んで、それまでは「はい」「いいえ」が目の動きでやっとならざるを得ないような方が、私にメールを送ってくれるような状態まで来て、世界が広がっているんですね。テクノロジーというのは、使い方1つで、むしろうまくつないでいく技術にも変わるかなと思っております。

**【舛添知事】** ちょっとよろしいでしょうか。椎名さんと猪子さんにたまたまオリンピックの話が出ていたから。1つは、椎名さん、2020東京万博ですね。もう少し、イメージで、宝物を集められると言ったんだけど、今でさえ、金を2020年に使いすぎると怒られちゃっているんで、怒られないようにするためにどうすればいいかということ、猪子さんのあれだと、メインスタジアムで、さっきの聖火リレーとか、開会式とかやっていて、ホログラムとかで芝居でもどこでも見れるようにするという感じですよ。そういう発想というのは恐らく今までなくて、IOCも8万人の会場じゃないと認めないとか、ハードばかりきているわけですよ。そうすると、極論すれば、ハードのメインスタジアムがなくてもというのは極論だけでも、サイズの面はどうか……。

**【猪子様】** どっちでもいいと思っているというか、そんなに必要ではないというか、あってもいいし、なくてもあまり重要ではないと。別にあることには反対はしていないですけど、あれば使うし、なければ、あんまり重要ではないという。

**【舛添知事】** そういう考え方の方が多いと助かるんですが。

**【猪子様】** いや、反対しないですよ。すごい変に……。

**【舛添知事】** いえいえ、今のは冗談です。

**【椎名様】** でも、ロンドンのオリンピックなんかでも、やはり立派な会場で、席が空いていたそうですよね。中継、ご覧になりましたか。見てもそうですよね。だから、

猪子さんがおっしゃったように、みなさんなかなかおうちをお出にならないんじゃないですか。それこそ、いろんなことで興味が散漫になっていますし。さっきの語学の生かし方とか、最初の一步という、人が自分で踏み出すところの一步みたいなこととかを考えると、ほかのご提案がおもしろそうだなというふうに思ってきますけどね。

予算のことですけど、よく文科省の方とかいろんな方から、何かやらないといけないって。例えば経産省の方が、幾らイベントを打たなきゃいけないという決まりがあるんだとかおっしゃるんで、それ、どこが、誰が決めたことなんですかと。その予算を全部集めて、1個大きいことをしたほうがいいじゃないという話をしていたんです。例えば日本列島の海岸線沿いで、日本は花火職人を誇っていますから、その方々のすばらしい花火を、海岸線でバンって一斉に打ち上げて衛星で撮るとか、皆さんがおっしゃっているのと同じ、アナログ、人力のこととテクノロジーと、ちゃんと両極のものを掛け合わせたようなこと、見切り発車するだけじゃなくて、きちっと地に足のついたやり方を示す、リーダーシップを見せつける場というのが、1つ意識しやすいんじゃないかと思って申し上げただけなんです。

**【舛添知事】** それと、エキスポ東京みたいな感じだとすると、ロンドンなんかのときに、街中を文化の祭典みたいにして。

**【椎名様】** はい、見てきました。

**【舛添知事】** さっきのホログラムじゃないけども、ああいう感じでやっても万博になりませんかというのが、私の率直な意見なんで、普通、エキスポ何とかっていうと、大阪万博で、あんだけ大きなパビリオンをつくって、これだけの場所ということになるんだけど、具体的に椎名さんがどういうイメージを持たれているかというのを知りたい。

**【椎名様】** そうですよ。大阪は大阪ですけど、東京は江戸前なので、そんな大きいところでドカンとやらなくもよろしいじゃないですか、渋好みですから。ちっちゃいところを生かすのが得意ですから。

**【舛添知事】** 粹な。

**【椎名様】** それはそうとして、万博跡地というところで私はたまたま育った、百道という、福岡の。すごくおもしろいものがずっと残っていて、やはり今訪れても文化的なおいが残っていますよね。それを東京都内に、どこかみんなが意識しやすい場所にあるという状態をつくれたらいいんじゃないかと思ったんですよ。それが、何でそれじゃないのかとおっしゃっている形と、私が提案申し上げたいところとの違いは、今既に足りな

い、現場では劇場が足りないだの、場がない、本当に枯渇していてみんなが困っている状態なんですよ。そのことを営利団体なんかが、民間がつくるというのであれば、例えばサントリーさんがつくられるとなったときに、1つのところに集中していて、いろんな意識が高まる場所になったほうが、より効果的じゃないかということとか、あとは先ほど申し上げたように、自慢が苦手な日本人ですから、誇れるような場所というシーンが欲しいなど、本場と言いたいということから、どうせやるならという感じでした。

**【舛添知事】** なるほどね。

あと、首藤さん、お話ししていないんですけど、3歳から義務教育というのは非常にある意味でチャレンジングな話なんで、何かご感想とか、皆さんに対するご質問があれば。

**【首藤様】** 私は、実は2歳からがいいかなと思っていたんですけど、前夜、夫に話したら、2歳は過激だとか言われまして3歳にしましたけれども、3歳から義務教育というのは、実はヨーロッパなんかではやっていますし、そのことによって非常にさまざまな効果を発揮しているんですね。長期的にわたってそれをプラスに働くということは、さまざまな研究で指摘をされていますので、ぜひ予算を考えたりするときに、短期的なものではなくて副次的な、二次的な影響を予算の中に組み入れて計算をしてみると、どちらが本当に財政的に効率がいいのかということをご検討いただきたいなというふうに思っています。

**【椎名様】** ちなみに、それはどういう内容なんですか。3歳から義務教育というときに、最初になさる内容を、さっきもお聞きしたかったんです。

**【首藤様】** 義務教育といっても、別に机に座らせて、あいうえおを教えるということではもちろんないです。保育的なものだと思います。これをかなり良質なものでやらないといけないということで、ヨーロッパなんかでは、公的な機関が一定の資格を出しながらやっていて、この内容は良質でなく粗悪なものになりますと、同時に母親はみんな雇用から撤退しますし、子供にも有害ですし、出生率も下がるということもわかっているんですね。なので、非常にこの良質性をどう担保するかということが非常に難しいんですけども、そういったところが非常に重要ななと思っています。

**【工藤様】** 私が持ってきた資料の、19ページに実はその答えがあります。イタリアのレッジョ・エミリア市という、世界で最も優れた幼児教育が実践されているところなんです。彼らのポリシーは、子供は立派な市民だということです。未来の市民じゃない、今の市民という捉え方をして、この市では、公立も私立も宗教の学校も全体に対して同等に、

このクリエイティブ・リユースセンターを貸し出して、あともう一つは、アトリエリスタという芸術系の専門教育を受けた人を全部の保育園、幼稚園に配属しているんです。さらに教育哲学を学問とした教育のプロであるペタゴジスタ、それ以外は保育士さん、調理師さん。その基本概念は、保育というのが、お母さんが面倒を見切れないから生活のアシストをする場ではないと言い切るんです。最もすばらしい教育の環境の場であって、家庭でできないからサポートするのではなくて、それ以上のことを子供たちに与える環境だという、考え方のスタートが違うんですね。そこが重要だと思います。

【首藤様】 本当におっしゃるとおりで、保育に欠ける子供を預ける場所だという考え自体をまず見直さないといけないというところがあります。あと、小中一貫校なんかも都内では率先してやりましたので、幼稚園と小学校の連携とか、保育園と小学校の連携というものも非常に重要なんじゃないかなというふうに思います。

【椎名様】 そうですよね。うち、上の子、中2なんですけど、ただ宿題を毎日おさめて。帰宅して、眠らないで宿題やって学校へ行くということだけでもう一日終わっちゃって、サラリーマンみたいなんです。だから、本当は7時間教育とかじゃないですか、毎日。そんなことを子供に課すこと自体、もう狂っているなと思っていて。

【首藤様】 いやいや、ずっと何時間、幼少の3歳の子を勉強させるとかというようなことは全く想定してないですね。

【椎名様】 そうですよね。早くからそれがスタートするんだったら、小学校でぎゅつとあそこまでやらされなくていいんじゃないかと思って、期待できるかなと思ったんです。

【首藤様】 そういう考えもあるかもしれませんが、より教育のあり方をどうするかというのは、就学時の前は、教育というよりも遊びの中から学ぶとか、集団性を身につけるとか、いろんな要素が当然あると思うんですね。そういったことをあまり考えずに、画一的に教育することだけが教育ではないと私は思っています。

【山崎様】 レッジョ・エミリアのビデオを見たことがあるんですけど、例えば幼稚園だったら、お昼ご飯を食べている間に、窓の外にキリンとかをかぶった人とかがずっと通り抜けるんですよ。その後、ライオンをかぶったのが追い掛けたりするんです。「今、見た？」みたいな。食べている子は見ていながら「何、何」とか言って、反対側のところにもそれが出てきて、ご飯食べ終わったら、みんなそれを追い掛けに行くんですね。それを追い掛けていくと、街の中に出ていくんですよ。街の真ん中の広場のところにライオンの像があるんですけども、そこへ行くと、そこで絵を描こうみたいなことになっていく。

保育園の施設の中だけじゃなくて、街を使って教育していくというのが、結局、最終的には愛着がわいていくんだと思うんですね。この街に生きて、どこか一旦出たとしても、もう一度戻ってきたいというふうに思う街になっていく、そういうことが全部ミックスされているというのが、すごくいい取り組みだなと思いましたね。

【前田副知事】      どうぞ。

【梅澤様】      今の話は本当に私も同感で、東京をどういう街に再構成していくかという仕事を、いろんなレベルで仕掛けられる人材をどれだけ東京に集められるかがキーだと思うんですね。山崎さんはファシリテーターと呼ばれていましたけれども、プロデューサーと言ってもいいし、デザイナーと言ってもいいと思います。そういう人材を、日本人だけではなくて世界から集められたら東京は本当に化けるし、世界一の都市になれると思います。これから2020にかけての数年間が、東京に行って仕事をしていてもいいかなと、世界中の才能ある人が一番関心を持ってくれるタイミングです。本気で東京を世界に向かって開いて、「才能ある人は東京に集まれ、東京で一番おもしろい仕事ができるぞ、東京でやった仕事は世界に発信力があるぞ」という状況をつくれさえすれば、本当に東京は変わるし、日本の起爆剤になると思います。知事や都庁の皆様は、ぜひそれを本心から進めていただきたいとお願いします。

【前田副知事】      皆さん、本当に大変活発な質疑もいただきましてありがとうございます。時間も迫っておりますので、大変名残惜しいですが、意見交換をこのぐらいで終了したいと思います。

最後に、舛添知事から一言お願いします。

【舛添知事】      皆さん、どうもありがとうございました。

今日は、楽しい話で、楽しいことが重要だというふうに思っていますし、それから、皆さん方の才能というか、お話を聞いていて、日本はこれだけパワーがあるなというふうに思って、ある意味で安心しました。今、ご提案が梅澤さんからありましたように、やっぱり世界に開かれた街で、外からの才能を出していかないといけない。私も海外へ行ったら、一生懸命東京のセールスマンとしてやっているんですけども、そういうことで、グランドデザインをやろうというのは、実を言うと、そういう大きな目標がないと動かないと思ったもので、昨年末、10年の長期ビジョンをやったら、それで終わっちゃったというんじゃない話にならないんで、まだまだやらんといかんことがいっぱいあるなということで、大変いいアイデアをいただきましたので、今後とも、こういうチャレンジングな話を続け

ながら、いい街にしたいと思いますので、本当に今日は心から感謝いたします。ありがとうございました。

**【前田副知事】** それでは、本日の懇談は終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

— 了 —